

富山県福光町

梅原安丸遺跡群 II

1992年3月

富山県福光町教育委員会



序

福光町の北端に位置する北山田地区は、山田川と大井川にはさまれた台地であり、近年東海北陸自動車道関連の発掘調査等で、縄文時代から近世までの様々な遺跡が発見され、その全貌が明らかにされようとしております。

今回は昨年度の調査に引き続き、県営ほ場整備事業に先だつ梅原安丸遺跡群の第2次発掘調査で、道路部分及び水田部分の調査がありますが、その他に来年度工事区の試掘調査も行なっております。

その間、調査にあたっては富山县埋蔵文化財センター・福光町シルバー人材センター・富山县農地林務部・県営ほ場整備事業梅原地区委員会を始め、多くの関係者の方や、地元住民の方々の御協力を賜り、スムーズに調査が推進されました。

さらに、本書の作成にあたり御尽力をいただきました各位に、深く感謝の意を表します。

平成4年3月

福光町教育委員会

教育長 吉江正二

例　　言

1. 本書は県営低コスト化水田農業大区画は場整備事業（梅原地区）に伴う、富山县福光町梅原安丸遺跡群の発掘調査概要である。
2. 調査は、富山县農地林務部の委託を受け福光町教育委員会が実施した。地元負担金については、福光町教育委員会が国庫補助・県費補助金を受けた。
3. 調査事務局は、福光町教育委員会振興課におき課長補佐兼文化財保護係長得地和彦が調査事務を担当し、教育次長兼振興課長飯田滋が総括した。また、調査に当たって作業員・飲料水・仮設調査事務所敷地等の確保については、福光町シルバー人材センター事務局長高瀬栄氏、同事務局員齊藤義男氏、福光町梅原中澤欣一氏、県営は場整備事業梅原地区委員会の御協力を得た。
4. 調査は、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて、福光町教育委員会が実施した。
5. 調査を実施した遺跡及びその調査期間は以下の通りである。

梅原安丸遺跡 平成3年5月16日～同年10月16日（延34日間）

梅原安丸Ⅱ遺跡3地区 平成3年5月7日～同年8月23日（延51日間）

梅原安丸Ⅲ遺跡4地区 平成3年5月14日～同年11月6日（延24日間）

梅原安丸Ⅳ遺跡3地区 平成3年5月9日～同年8月19日（延19日間）

梅原安丸Ⅴ遺跡4地区 平成3年5月21日～同年9月3日（延21日間）

試掘調査

第1期調査：No.1・No.2遺跡（梅原出村Ⅱ遺跡） 平成3年6月21日～同年6月27日

第2期調査：No.4・No.5・No.7遺跡（梅原出村Ⅲ・梅原上村遺跡） 平成3年9月2日～同年9月13日

6. 調査参加者は次のとおりである。

本調査 富山県埋蔵文化財センター主任斎藤隆・同センター文化財保護主事岡本淳一郎

試掘調査 富山県埋蔵文化財センター主任久々忠義・同センター文化財保護主事鳥田修一・越前庵祐

7. 発掘調査・資料整理・本書の作成には、下記の各氏から様々な援助をいただいた。記して深甚なる謝意を表したい。（敬称略・五十音順）

安念幹倫・尾崎靖子・河西健二・狩野睦・柿島昭彦・久々忠義・斎藤裕代・酒井重洋・清水征子・神保孝造・

杉崎容子・土山節子・上田ユキ子・坪田和子・野末浩之・端崎宏子・橋本正春・麻柄一志・山口チズ子・山本慎子

8. 本書の編集と執筆は調査担当者の斎藤・岡本・鳥田が行い、個々の責は文章末に記した。

9. 本書は本文・図版・付図からなる。

10. 道標は種別毎に一連の番号を付けその前にSB：堀立柱建物、SD：溝、SK：土坑、SG：池状遺構などの分類記号を付記する。

11. 本書で使用した方位は真北、高さは海拔である。

12. 本書の土層の色調は小山正忠・竹原秀雄編著 1967 「新版標準土色帖」 日本色研事業株式会社を用いた。

13. 本書の石材鑑定は富山県埋蔵文化財センター所長邑本順亮氏による。

目 次

序

例言

目次

I 位置と環境	1	第25図 梅原安丸Ⅱ遺跡4地区遺構図	29
第1図 位置と周辺の道路	1	A 遺構	30
II 調査にいたる経過	2	B 遺物	30
第1表 事業計画地内遺跡一覧	2	第26図 梅原安丸Ⅱ遺跡4地区出土遺物実測図	30
第2図 梅原安丸遺跡群付近の地図	3	梅原安丸Ⅱ遺跡	30
第3図 事業計画地と道路の分布	5	(1) 3地区的調査	30
III 調査の概要	6	A 遺構	30
1 調査の経過	6	B 遺物	30
2 調査の方法	6	第27図 梅原安丸Ⅲ遺跡の地形と区割図	31
3 略序	6	第28図 梅原安丸Ⅲ遺跡3地区遺構配置図	31
4 梅原安丸遺跡	7	第29図 梅原安丸Ⅲ遺跡3地区出土遺物実測・拓影図	32
第5図 梅原安丸遺跡の地形と区割図	7	第30図 梅原安丸Ⅲ遺跡3地区出土遺物実測・拓影図	32
A 遺構	7	(2) 4地区的調査	33
第6図 梅原安丸遺跡遺構配置図	8	A 遺構	33
B 遺物	8	B 遺物	33
第7図 梅原安丸遺跡遺構図(1)	9	第31図 梅原安丸Ⅲ遺跡4地区遺構図	34
第8図 梅原安丸遺跡遺構図(2)	10	第32図 梅原安丸Ⅲ遺跡第1号生居跡出土遺物の分類と出土位置	35
第9図 梅原安丸遺跡出土遺物実測・拓影図(1)	11	第33図 梅原安丸Ⅲ遺跡4地区出土遺物実測・拓影図	36
第10図 梅原安丸遺跡出土遺物実測・拓影図(2)	12	器種組成の比較	36
5 梅原安丸Ⅱ遺跡	13	M まとめ	37
(1) 3地区的調査	13	第34図 遺物の分布	37
第11図 梅原安丸Ⅱ遺跡の地形と区割図	13	引用・参考文献	38
A 遺構	13	V 試掘調査の概要	39
第12図 梅原安丸Ⅱ遺跡3地区遺構図(1)	14	1 No.1 遺跡	39
第13図 梅原安丸Ⅱ遺跡3地区遺構図(2)	15	2 No.2 遺跡	39
第14図 梅原安丸Ⅱ遺跡3地区遺構図(3)	16	3 No.4・5・7 遺跡	39
B 遺物	17	第35図 試掘調査位置と遺跡範囲 No.1 遺跡	40
第15図 梅原安丸Ⅱ遺跡3地区出土遺物実測・拓影図(1)	19	第36図 試掘調査位置と遺跡範囲 梅原出村Ⅱ遺跡	40
第16図 梅原安丸Ⅱ遺跡3地区出土遺物実測・拓影図(2)	20	第37図 試掘調査位置と遺跡範囲 梅原出村Ⅲ遺跡・梅原上村遺跡	41
第17図 梅原安丸Ⅱ遺跡3地区出土遺物実測・拓影図(3)	21	第3 表 平成3年度既存は場整備事業(梅原安丸地区)に係る埋蔵文化財包括地試掘調査結果一覧	41
第18図 梅原安丸Ⅱ遺跡3地区出土遺物実測・拓影図(4)	22	第38図 遺物実測・拓影図 梅原出村Ⅱ遺跡・梅原出村Ⅲ遺跡	43
第19図 梅原安丸Ⅱ遺跡3地区出土遺物実測・拓影図(5)	23	第39図 遺物実測・拓影図 梅原出村Ⅲ遺跡	44
第20図 梅原安丸Ⅱ遺跡3地区出土遺物実測・拓影図(6)	24		
第21図 梅原安丸Ⅱ遺跡3地区出土遺物実測・拓影図(7)	25		
第22図 梅原安丸Ⅱ遺跡3地区出土遺物実測・拓影図(8)	26		
第23図 梅原安丸Ⅱ遺跡3地区出土遺物実測・拓影図(9)	27		
(2) 4地区的調査	28		
第24図 梅原安丸Ⅱ遺跡4地区遺構配置図	28		

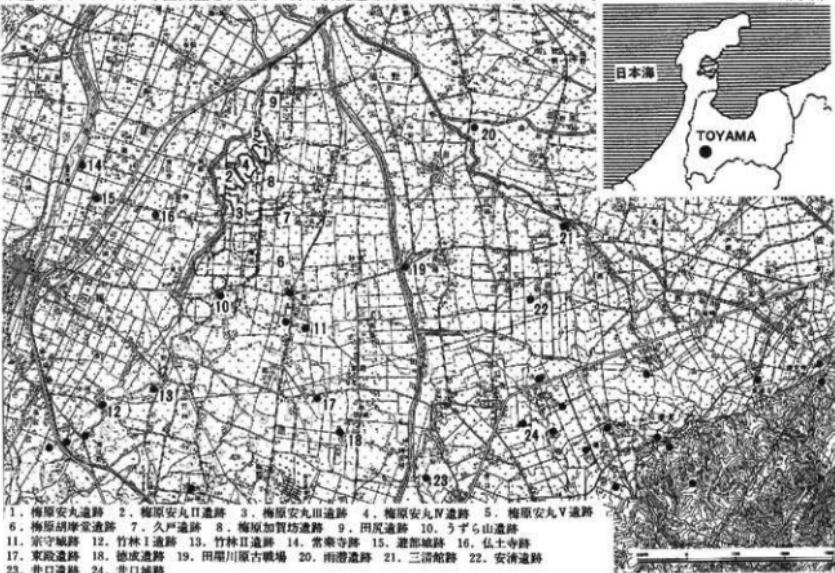
I 位置と環境

(第1・2図、図版1)

梅原安丸遺跡群の位置する福光町は富山県の西側に位置し、石川県との県境地帯である。町の中央部を小矢部川が南北に貫流する。この小矢部川の両岸には平野部が広がり、散居村で著名な砺波平野の一画を成している。また町の西と南は山地で、西には養老3(719)年に泰澄大師が開山と伝えられる笠峰医王山や桑山石・小院瀬見石等の建築材等に用いられた石材を産出する山々がある。また医王山ではその山岳信仰を解明すべく調査が進められている。梅原安丸遺跡群の位置する梅原地区は町域の東側の平野部にある。遺跡群の位置する付近は小矢部川に注ぎ込む山田川と大井川に挟まれた地域で、山田川左岸段丘と呼ばれる[富山県1981]。この付近は標高64~68mの河岸段丘である。

梅原安丸遺跡群の位置する段丘上には、古くから知られる竹林I遺跡・徳成遺跡等の縄文時代の遺跡が分布している。鎌倉時代には梅原地区を含む一帯は後三条天皇の御願寺円宗寺の所領石黒莊の内の山田郷[富山県1984]に含まれていたものと考えられる。この石黒莊に関して領家と地方の有力土豪である地頭との争論による史料が残されている。これら土豪間係すると考えられる宗守城跡をはじめとする城館跡がこの地域を含む一帯に多く残されている。そして、近世初頭の『元和五年利波郡家高ノ新帳』によれば「家数一四軒梅が原」と記されている[福光町史編纂委員会編1971a]ことから村が存在していたと思われる。梅原安丸遺跡群の西の在房一久戸一宗守地区には古くから重要な交通路である高岡から城端町に至る巡査使道が通っていた[新藤1981]。そして、宗守は福光または井波への分岐する交通の要衝であるため山田郷の中心として栄えた。また梅原村には承元3年に創建[福光町史編纂委員会編1971b]と伝えられる以速寺がある。こうした経緯を追って農村地帯を形成していくが、大正12年から県下に先駆けほ場整備が実施されており、地形が大きく変化した。また近年、当遺跡群の東側では東海北陸自動車道開通の調査で中世から近世を中心とする大遺跡の梅原胡摩堂遺跡をはじめとする遺跡群の発掘調査[富山県文化振興財团1990・1991]が進められており、今回調査を実施した梅原安丸遺跡群とのかかわりが注目される。

(圖本)



第1図 位置と周辺の遺跡 (1/100,000)

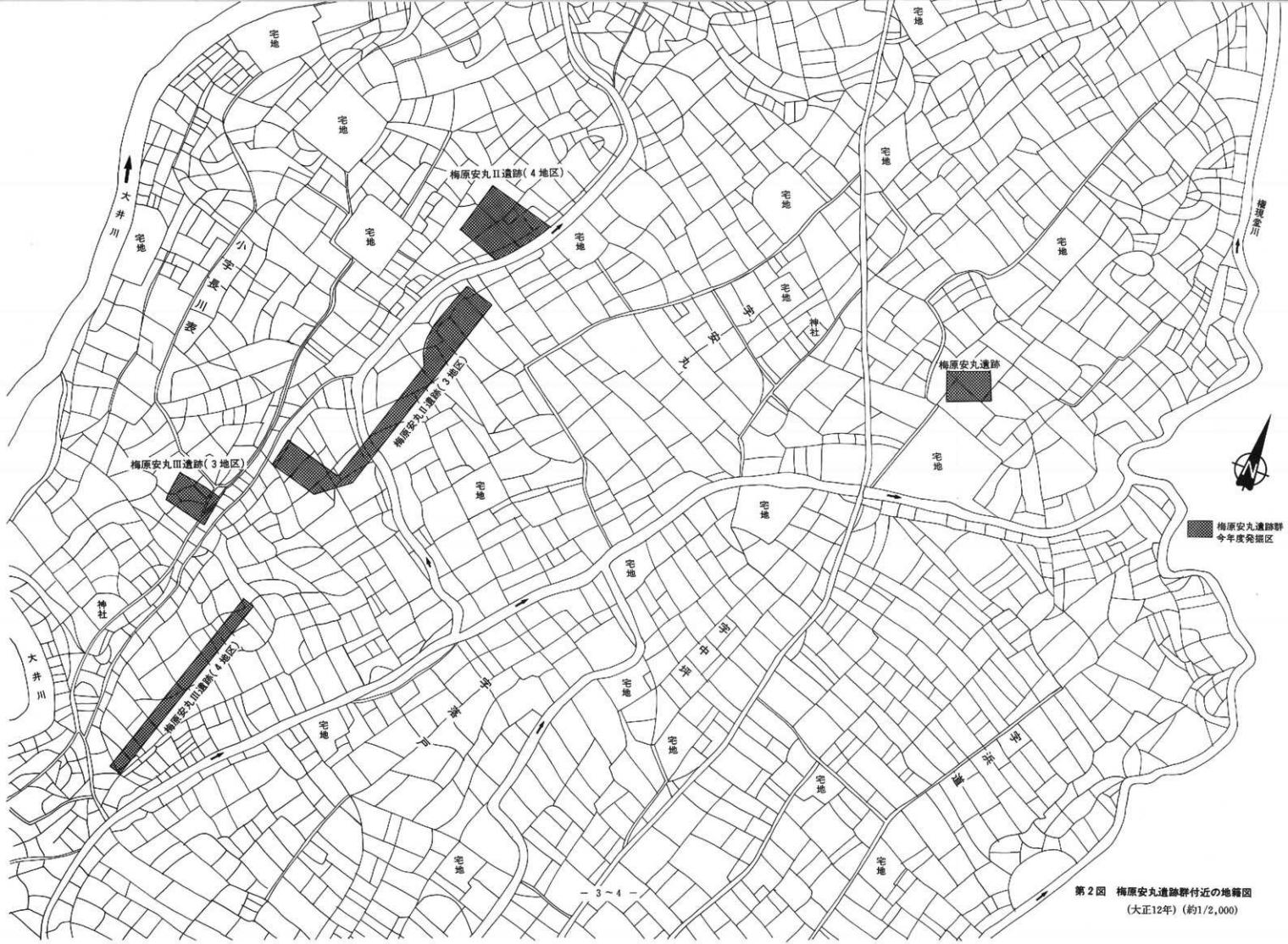
II 調査にいたる経過

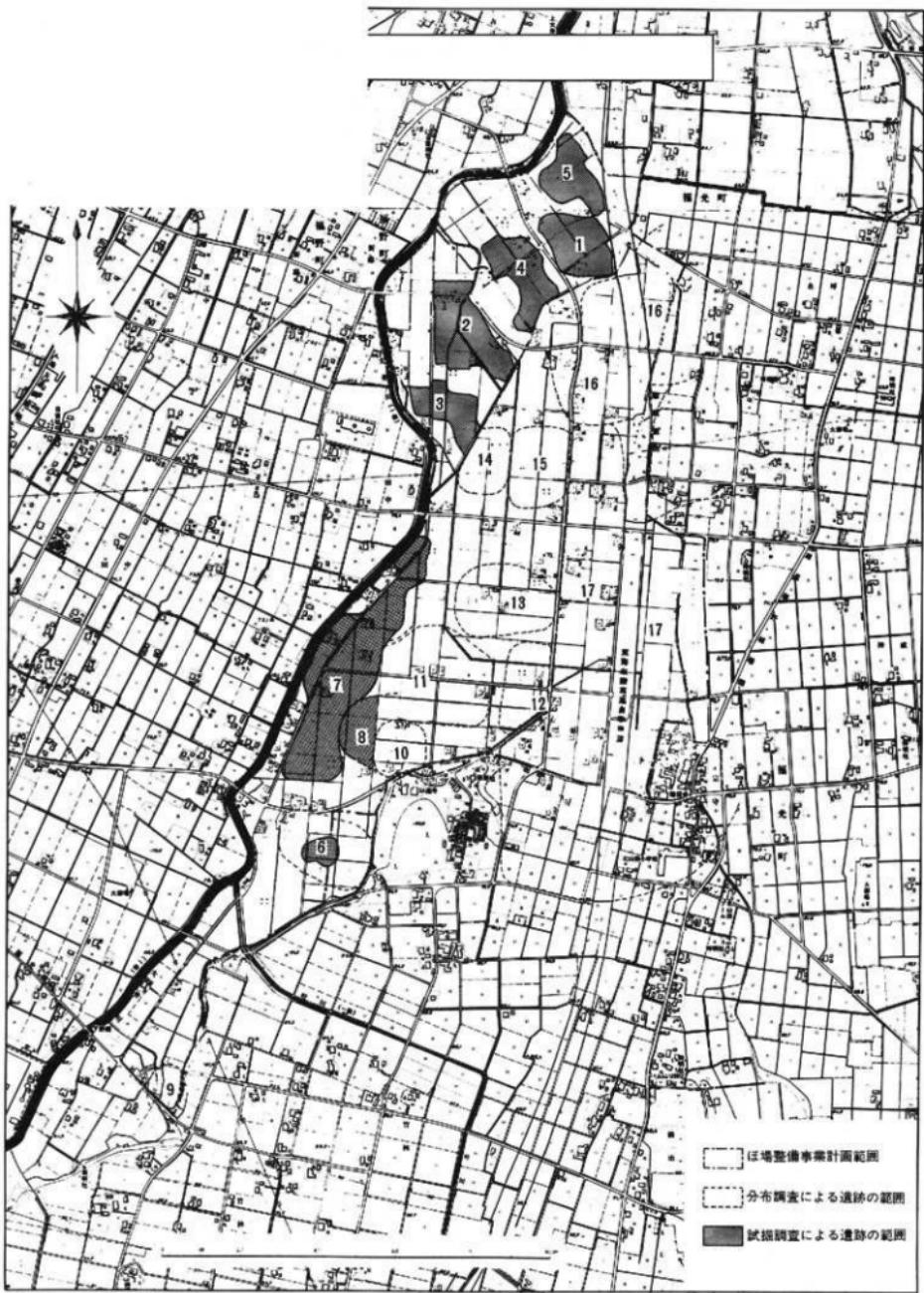
遺跡群の所在する福光町梅原地区は、昭和初期に耕地整備が完了されて以来、大型のは場整備が行われないまま、現在に至っていた。平成元年度には、21世紀に向けての大型農業に対応するための「低コスト化水田農業大区画は場整備事業計画」が策定された。同事業は平成2年～5年を事業年度とし、梅原地区93haを対象とする計画で、当地の東側には、東海北陸自動車道建設用地が確保され、梅原加賀坊遺跡などが知られ、隣接する、は場整備計画地への遺跡の広がりが懸念された。このため、計画策定に伴い遺跡の照会を受けた町教育委員会は、県埋蔵文化センターからの調査の派遣を得て、平成元年12月に2年度工事区を対象とした約20haの分布調査を実施、10地区（8地区が新発見）の散布地を確認。平成2年度には国庫補助を受け同地区において、春・秋2回の試掘調査を実施し、当遺跡群の範囲を確認し、県農地林務部・県教育委員会・地元土地改良区と遺跡の保護措置の協議を重ねた。結果、遺跡群の大半は水田下に保存する計画に変更されたが、一部の面工事・農道建設・排水路部分で本調査が必要となり、特に工事を急ぐ排水路部分に係る遺跡（4遺跡7地区）を2年度に、残りを3年度（3遺跡5地区）に調査することで合意した。

尚、残りの計画地73haは2年12月に分布調査を実施、12地区（9地区が新発見）の散布地が確認された。3年度の試掘調査は約10haを対象に春・秋2回、工事区域に係る5地区を実施した。（第1表・第3図）（斎藤）

No.	遺跡名	所属時代	立地	発見された遺構	発見された遺物	備考
1	梅原安丸	縄文・中世・近世	水田・宅地	掘立柱建物柱穴、穴、溝、堅穴 石造橋、井戸、池塘	土師質土器、珠洲焼、磁器、漆器 器皿、五輪塔、石臼、下駄	H.3
2	梅原安丸Ⅱ	縄文（後期）、古代、 中世、近世	水田・宅地	掘立柱建物、同柱穴、溝、井戸、 土器種々	縄文土器、石器、須恵器、漆器 器皿、土師質土器、珠洲焼、陶磁器	H.2、H.3 4地区本調査
3	梅原安丸Ⅲ	縄文（後期）、占墳、 古代、中世、近世	水田	堅穴住居跡（古墳）、掘立柱建物、 柱穴、穴、溝、井戸	縄文土器、石器、須恵器、土師 器皿、土師質土器、珠洲焼、陶磁器	H.2、H.3 4地区本調査
4	梅原安丸Ⅳ	縄文か、古代、中世、 近世	水田・宅地	掘立柱建物柱穴、穴、溝、堅穴 石造橋、井戸	縄文土器、須恵器、珠洲焼、上 部質土器、陶磁器	H.2 2地区本調査
5	梅原安丸Ⅴ	縄文か、古代、中世、 近世	水田	掘立柱建物。掘立柱建物柱穴、 穴、溝、井戸	縄文土器、須恵器、珠洲焼、上 部質土器、陶磁器、曲物底板、 等々小製品	H.2 1地区本調査
6	梅原出村Ⅰ	縄文（晚期）、古代～ 中世	水田	穴、柱穴、溝	縄文土器、石器、須恵器、土師 器皿、珠洲焼	
7	梅原出村Ⅱ	縄文（前・後・晚期、 中期？）、古代～中 世、近世、近代？	水田・宅地	柱穴、穴、堅穴住居跡、溝、遺 物包含層（縄文、古代）	縄文土器、石器、須恵器（含 有上器）、土師器、珠洲焼、陶磁 器	
8	梅原上村	縄文、古代～中世、 近世	水田・宅地	穴、遺物包含層（古代）	縄文土器、石器、須恵器、土師 器皿、珠洲焼、磁器	旧No.5の一部（確認部分 のみ）
9	No.1	縄文	水田・宅地		縄文土器（打製石斧）	
10	No.3	縄文か、中世	水田・宅地		剝片、土師質土器、珠洲焼	
11	No.5	縄文、古代、中世、 近世？	水田・宅地		縄文土器（打製石斧）、須恵器、 土師器、土師質土器、珠洲焼、 磁器	
12	No.6	中世、近世	水田・宅地		土師質土器、珠洲焼、陶磁器	
13	No.8	縄文か、中世、近世	水田・宅地		縄文土器（？）、土師質土器、珠 洲焼、磁器	
14	No.9	縄文	水田		縄文土器、剝片	梅原安丸Ⅲの 続きか
15	No.10	古代、中世、近世	水田・宅地		須恵器、土師質土器、珠洲焼、 磁器	
16	梅原加賀坊	縄文、古代、中世、 近世	水田・畑地 ・宅地		縄文土器（打製石斧）、須恵器、 土師器、土師質土器、珠洲焼、 磁器	
17	梅原胡摩堂	古墳か、古代、中世、 近世	水田・畑地 ・宅地		須恵器、土師器、土師質土器、 珠洲焼、磁器	

第1表 事業計画地内遺跡一覧（No.は第3図の番号を示す）





第3図 事業計画地と遺跡の分布

III 調査の概要

1 調査の経過 今回の調査は平成2年度の協議に基づき農道新設などの本調査であり、以下地区毎に記述する。

梅原安丸遺跡 分布調査では土師質土器（中世）を確認。試掘調査では竪穴状遺構・溝・柱穴・穴・土師質土器・珠洲・磁器・木製品（漆器）などを確認。田面調整で削平される540m²を本調査。

梅原安丸II遺跡3地区 分布調査では縄文土器・土師器を確認。試掘調査では縄文時代土器だまり・柱穴・溝・穴・縄文土器・土師器・須恵器・珠洲などを確認。農道部分と田面調整で削平される1899m²を本調査。

梅原安丸II遺跡4地区 分布調査では珠洲・須恵器を確認。試掘調査では柱穴・須恵器・土師器・珠洲・磁器などを確認。田面調整で削平される1240m²を本調査。

梅原安丸III遺跡3地区 分布調査では縄文土器・須恵器・珠洲を確認。試掘調査では穴・縄文土器・珠洲などを確認。田面調整で削平される635m²を本調査。

梅原安丸III遺跡4地区 分布調査では縄文土器・須恵器・珠洲を確認。試掘調査では溝・縄文土器・珠洲などを確認。東側の1地区（幹線排水路）はh2年度で本調査。農道部分にかかる924m²を本調査。

2 調査の方法（第5・11・27回） 調査はまず重機による耕作土の除去を行い10m間隔に基準杭を設けX軸を南北方向にとりY軸を東西方向にとり、2m×2mを一区画とし土層観察用のあぜは適宜設置した。（基準杭の設置は平成2年度の杭を利用、但し若干の誤差を生じた地区もある）耕作土の排土終了後は人力による遺構の検出・マーキングおよび位置の図化作業を行う。遺構の発掘は梅原安丸II遺跡3地区・同III遺跡3地区・同III遺跡4地区・梅原安丸遺跡・同II遺跡4地区的順序で行った。（II遺跡3地区的北側の一部分は2度発掘）

（斎藤）

3 層序（第4回）

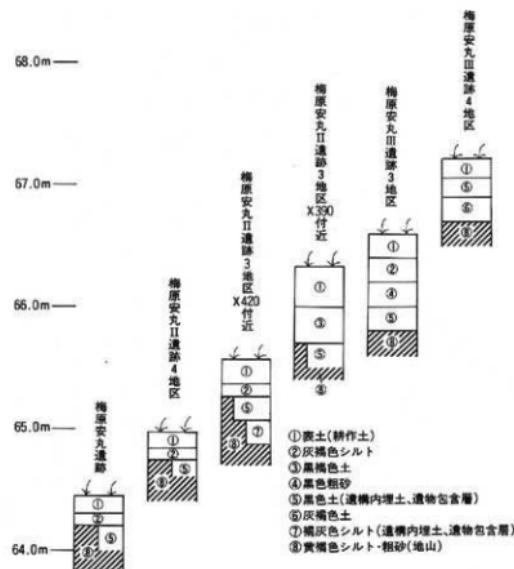
梅原安丸遺跡群の一部は、表層腐植質多湿黒ボク土の石本続〔富山県1981〕よばれる土壤で主に水田地帯となっている。

梅原安丸遺跡群では主として①層（表土・耕作土）・②層（灰褐色シルト・水田床土）・⑤層（黒色土・遺構内埋土・遺物包含層）・⑧層（地山、黄褐色シルト・粗砂）で構成される。

梅原安丸遺跡では①・②層の下に地山が直ぐ表れる。遺構内には⑤層が堆積する。

梅原安丸II遺跡3地区北側では⑤層の下に部分的に⑦層（褐灰色シルト・遺構内埋土・遺物包含層）があり包含層が2層になる。3地区的南側（X390付近）では③層（黒褐色土）が堆積した谷部を検出した。

梅原安丸III遺跡3地区では⑤層の上に④層（黒色粗砂）が堆積し、4地区では⑤層の下に⑥層（灰褐色土）がある。（岡本）



第4回 梅原安丸遺跡群土層模式図

4 梅原安丸遺跡（第5・6図、図版2・3）

調査対象地は梅原安丸遺跡の中央部分に係る田面調整工事予定地である。発掘区の東では東海北陸自動車道関連の調査が富山県文化振興財團により行なわれ中・近世川跡、溝、土杭が検出された〔富山県文化振興財團1991〕。今回の調査区は東西30m、南北19.5mの方形の範囲で、Y軸はN-36°-Eである。標高は表土上面で64m前後である。

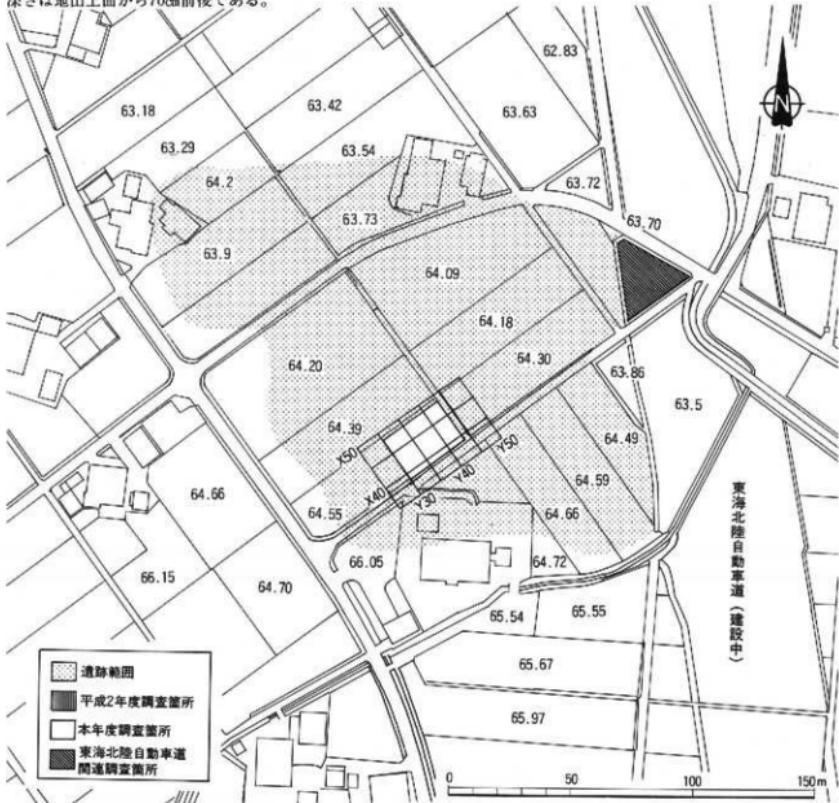
A 遺構（第7・8図、図版3・4）

a 竪穴状遺構（第7図） SK-17は当初は溝かと見られたが、発掘区西様の観察で竪穴状をすることが解った。規模は上端で3.5m×2.2m、底面で3.3m×1.7mで長方形となる。

b 井戸（第7図、図版4・5） SK-16は素堀の井戸で、平面形が円形を呈する。

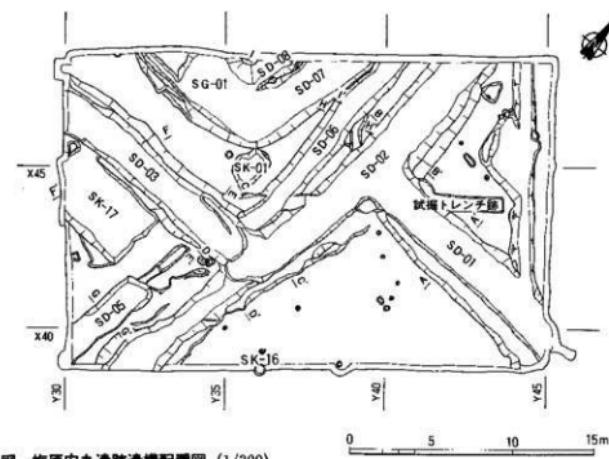
c 穴（第7図） SK-01は不整形の平面形で、長軸2.5m×短軸1.7mの規模の穴である。

d 溝（SD） SD-01は調査区東角から西角への方向でSD-02に直角に接する。溝底のレベル差は殆どない。地山上面では溝幅3.3~4.5m・底面で2.2~2.5mで、断面は逆V字形になるが、南側は幅が1m前後のテラスになり2段になっている。埋土は黒色シルトを基本とするが、ある程度（④層）埋まつた段階で地山に類似した②層が入っている。深さは地山上面から70cm前後である。



第5図 梅原安丸遺跡の地形と区割図 (1/2,000)

SD-02は調査区北側から南角付近に調査区を抜けておりSD-01・03が分岐する。SD-03が合流するX42・Y36付近以南は深さ40cmと浅くなっている。溝底のレベルは南から北へと深くなっている。地山上面で溝幅2~4.5m、で断面は逆台形状になるが下の部分は垂直に下りている部分がある。埋土は黒色シルトを基



第6図 梅原安丸遺跡遺構配置図 (1/300)

本とするが、ある程度埋まつた段階で地山に類似した上もしくは灰黄褐色粗砂が入っている。深さは地山上面から60cm前後である。

SD-03は調査区西角付近からSD-02に直角に合流する。溝底のレベルは東から西へと深くなっている。上面で溝幅3.3~4.0m、下面で1.8~2.5mで、断面は逆台形状になる。埋土は黒色シルトを基本とするが、ある程度埋まつた段階で地山に類似した上が入っている。深さは地山上面から90cm~1m前後である。

SD-05は調査区南角付近からSD-02と平行して北に向かって伸びる。溝幅は地山上面で2m前後、底面で1.4mを計る。埋土は黒色シルトを主体とする。深さは30cm前後である。

SD-06はSD-02と平行しておりSD-03に直角に接する。SD-02と同時に存在していた可能性があるが、ある程度埋まつた段階でSD-02だけになるようである。幅は上面で1.7~1.9m、底面で1m前後である。深さは地山上面から50cm前後である。溝底のレベルは南から北へと深くなっている。

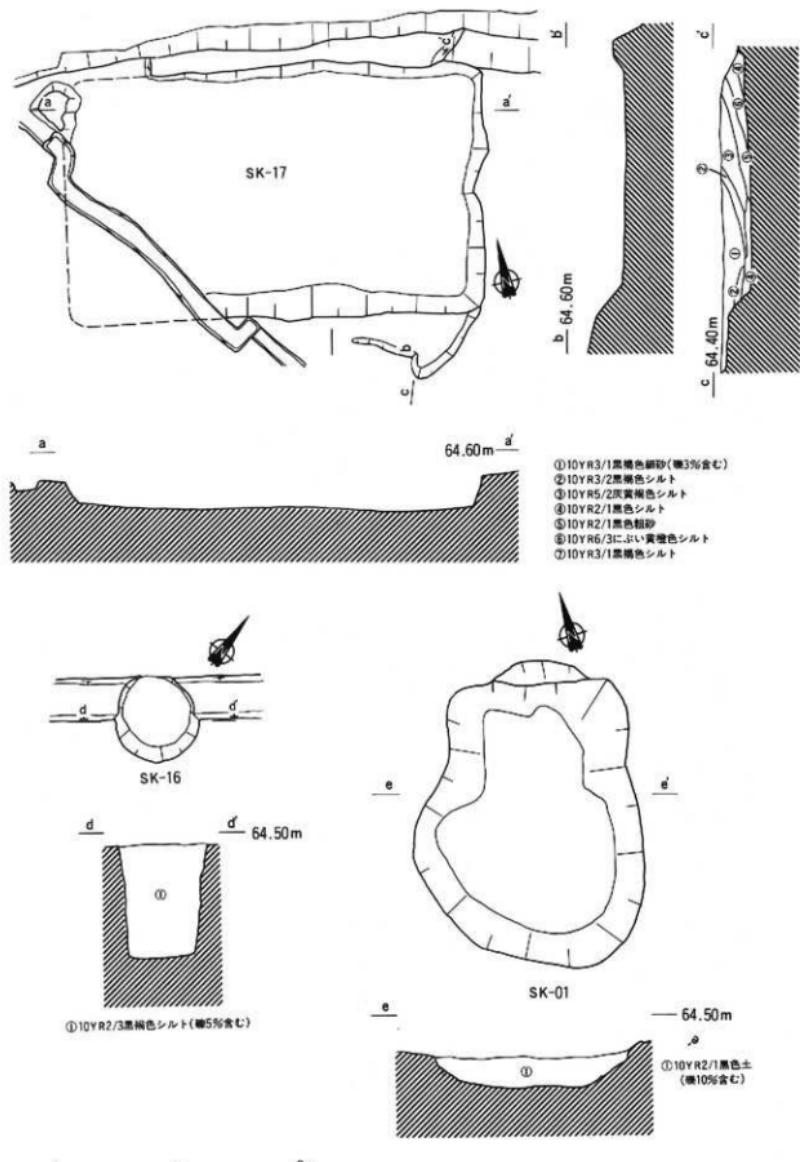
a 池状遺構 (図版4の9~10) SD-07・08、SG-01は発掘区の制限のため規模・形態は不明であるが、これらは一連の遺構である。SG-01は、その西側が発掘区の壁の観察で西に延びないことが解ったため池状を呈すると考えられた。この南側には石列 (図版4~9~10) が検出された。

B 遺物 (第9~10図、図版14~15)

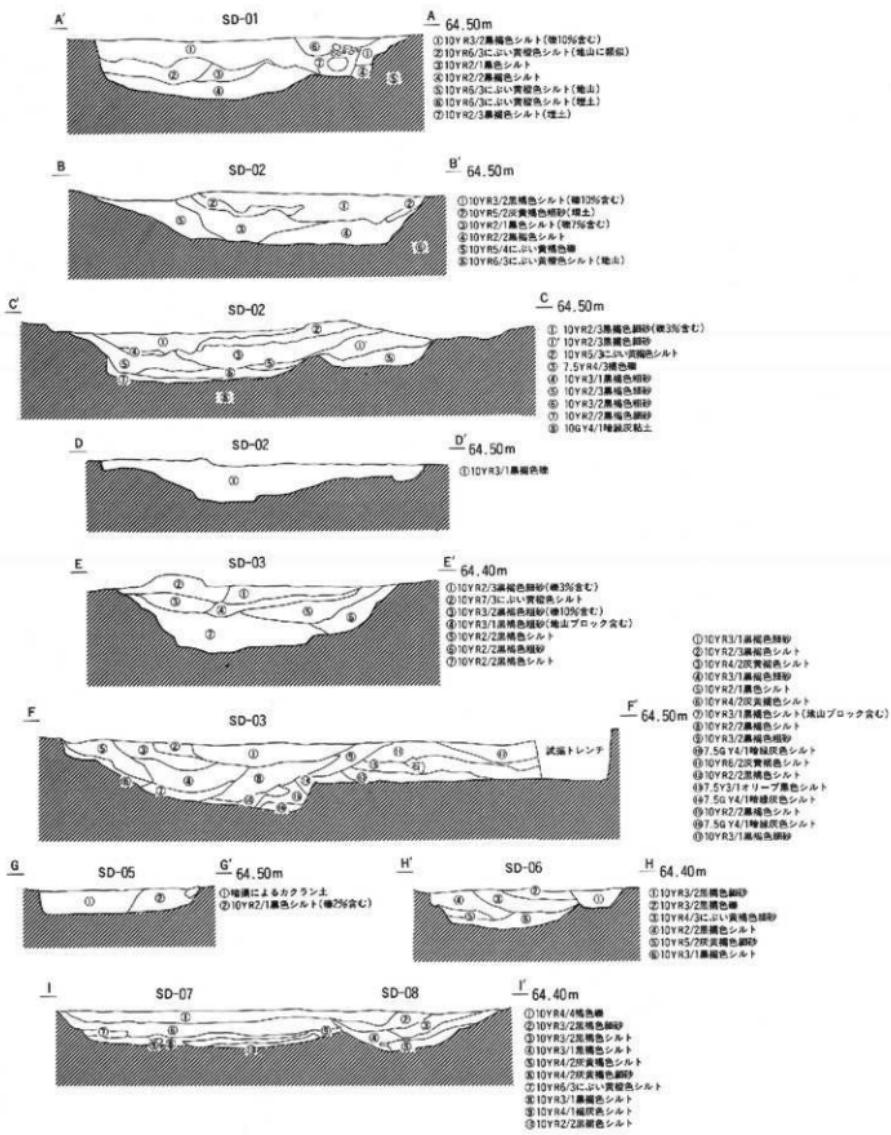
a 土器・陶磁器 (第9図、第10図、図版14) 2は漚戸・美濃の灰釉小皿で底部内面を除いた全面に施釉される。4は瓷器系陶器の底部。5は底部イトキリ。8は珠洲瓶子か。11・12は漚戸・美濃の天日茶碗で大窯I~II期 [井上1985] (16世紀前半) と考えられる。漆による接合痕がある。17は土師器で体部を2段に撫てる。18は珠洲鉢でV期 (15世紀後半) [吉岡1989] とみられる。19・20は瓷器系陶器。26は珠洲陶の鉢でV期 [吉岡1989] に属するとみられる。31は越前焼鉢でIV期 [崎崎・田中1986] か。2は青磁で16世紀 [上田1982] に属すると考えられる。

b 木製品 10は達磨下駄。11は総黒色漆器碗で内底面に赤色漆で紅葉の葉が描かれている。12は総黒色漆器碗で、内底面と体部外面に丸の内に草の様な植物を描く。11・12は漆器の縦年 [四柳1991] 縦期 (15世紀) に類似。

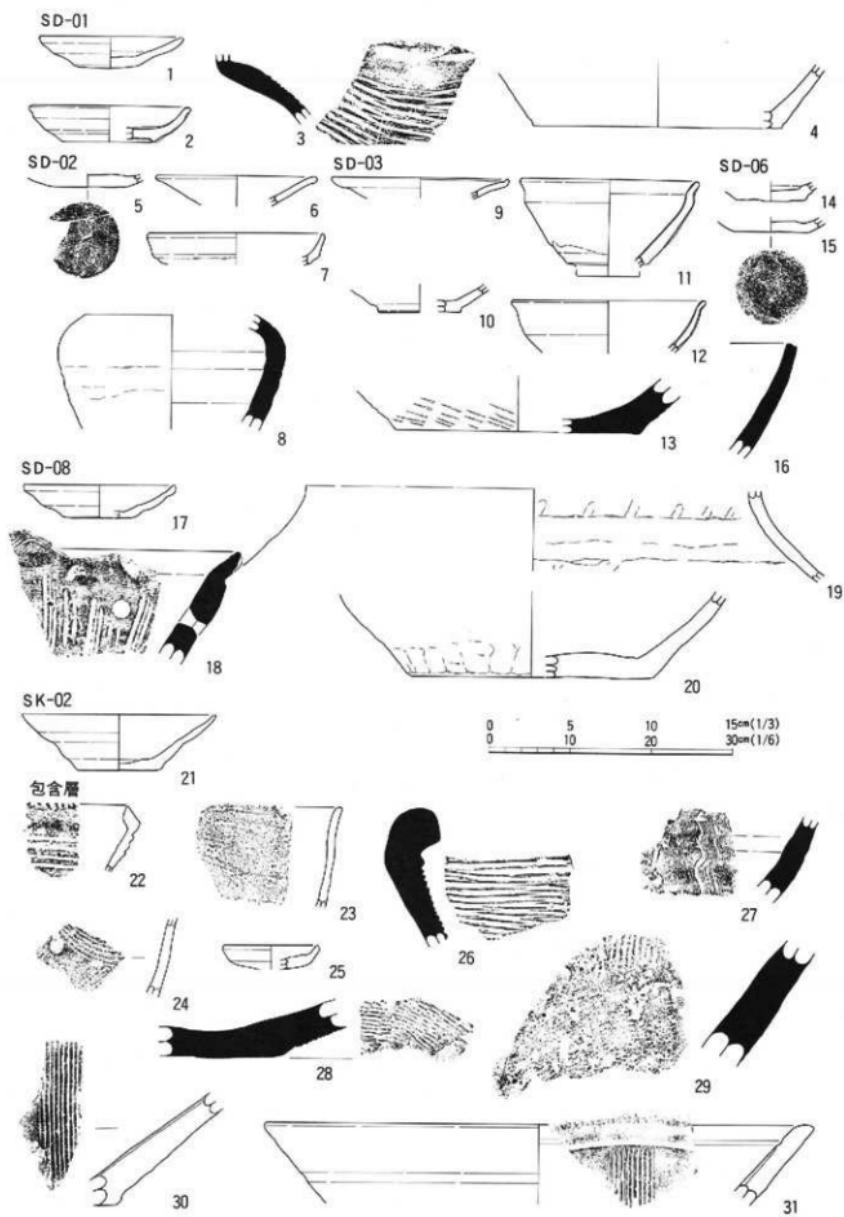
c 石製品・石造物 13・14は粉挽き臼の上臼。15は五輪塔の空・風輪。16は石鉢。石材は砂岩。 (調査)



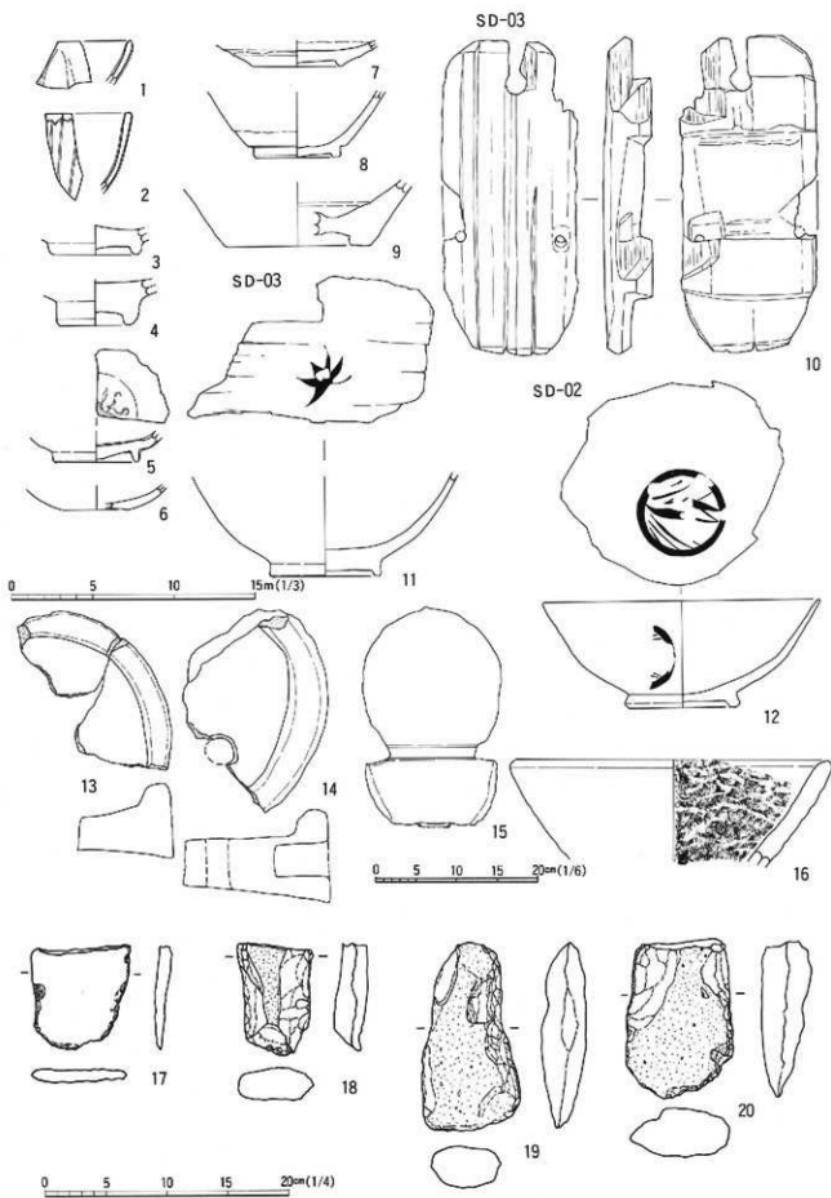
第7図 梅原安丸遺跡構造図(1) (1/40)



第8図 梅原安丸遺跡構造図(2) (1/40) 図中のアルファベットは第6図と一致



第9図 梅原安丸遺跡出土遺物実測・拓影図(1) (1/3、4・13・19・20は1/6)



第10図 梅原安丸遺跡出土遺物実測・拓影図(2) (1/3、13~16は1/6、17~20は1/4)

5 梅原安丸Ⅱ遺跡（第11図）

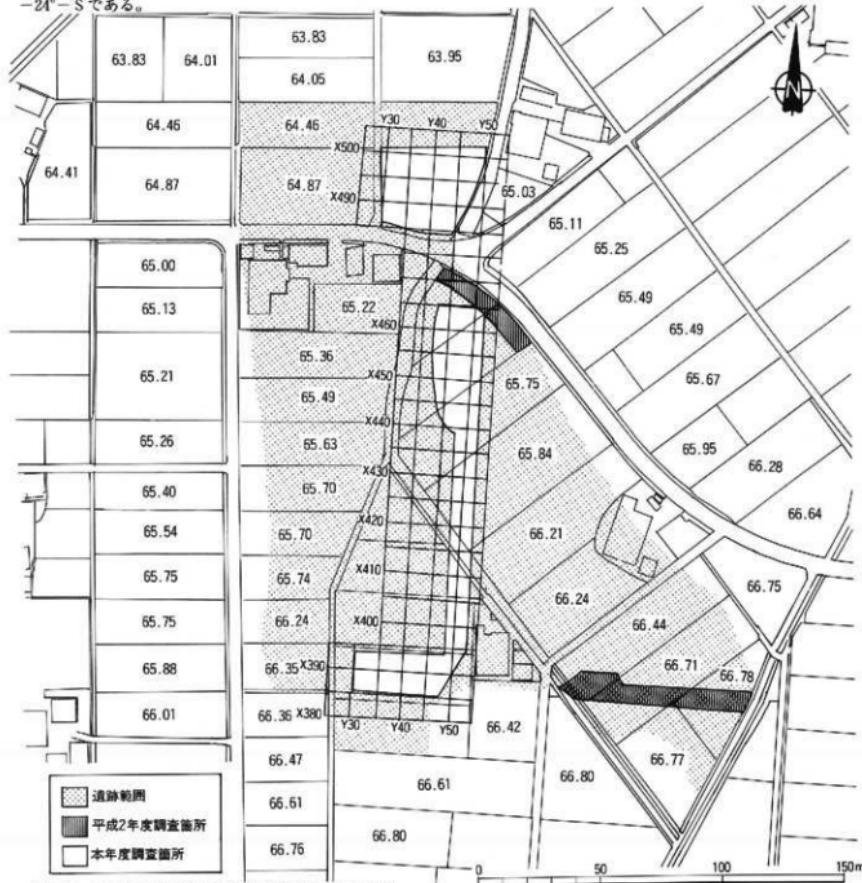
昨年度は1地区・2地区の2箇所を調査した。〔神保1991〕。今年度も3地区・4地区的2箇所を調査をした。

(1) 3地区の調査（付図、図版5の2・3、図版6）

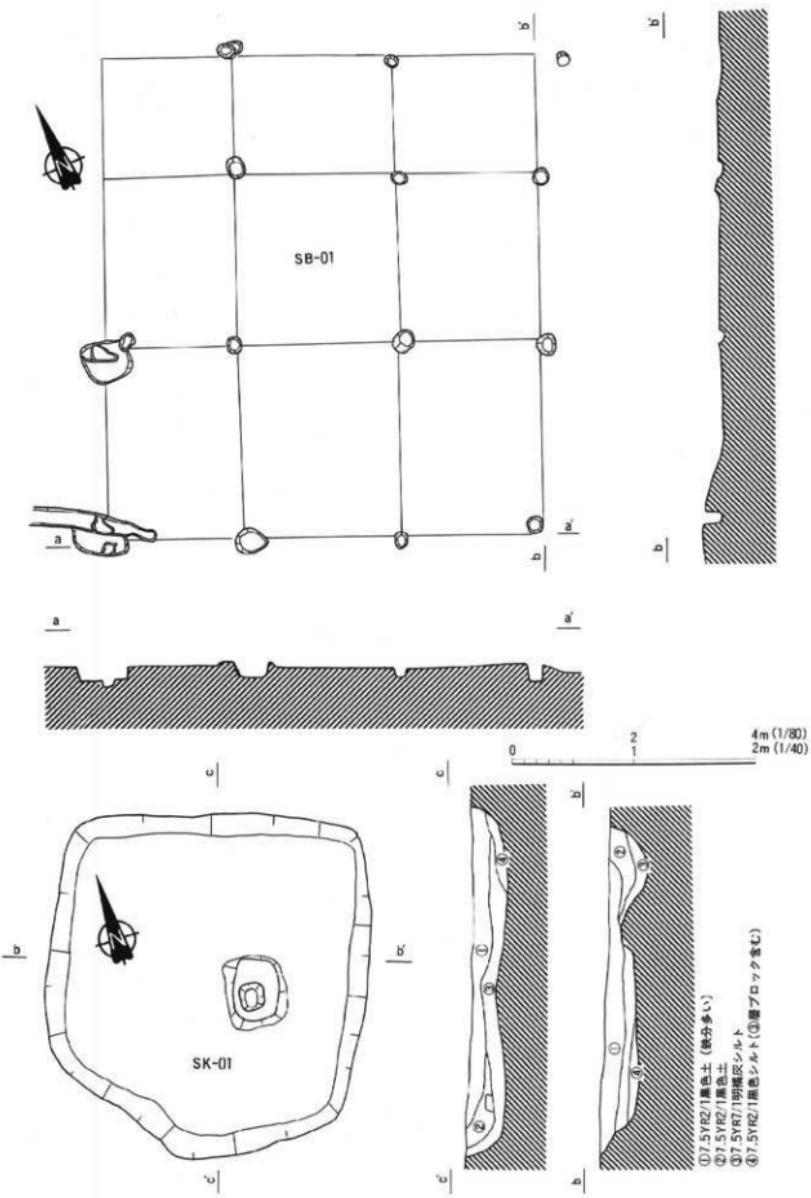
調査対象地は遺構の中央部分に係る幹線道路予定地1箇所と田面調査工事予定地2箇所である。延長170mの逆「L」字形の発掘区である。Y軸はN-4.5°-Eである。標高は表土上面で65~66mである。北側は灰褐色シルトが20~30cm部分的に堆積し、2枚の遺構面を形成している。

A 遺構（第12~14図） 堀立柱建物、竪穴状遺構、井戸、穴、溝、土器溝りを検出した。

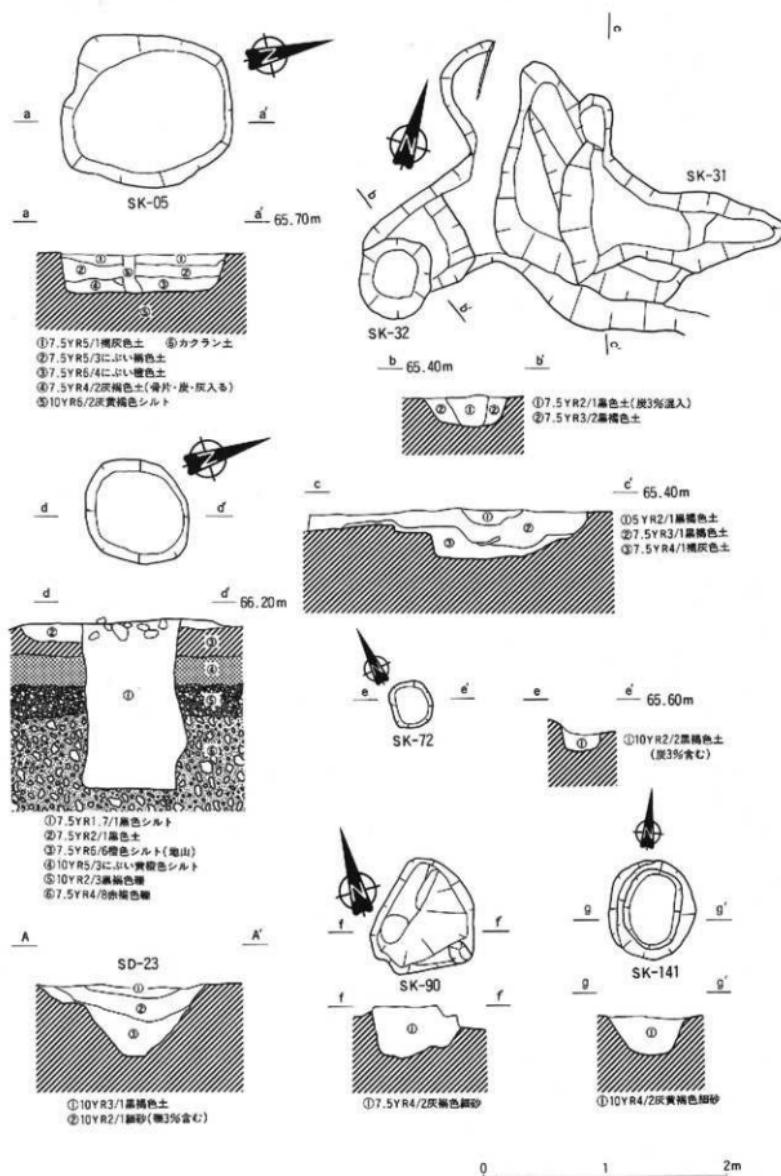
a 堀立柱建物 SB-01は東西棟で、身舎南北2間×東西2間以上の総柱建物である。柱間寸法は、桁行が2.2+2.6+2.2mで、梁行が3.2+2.8mで北面に庇がある。柱穴は直径20~60cmで、深さは20~30cmである。建物方位は、E-24°-Sである。



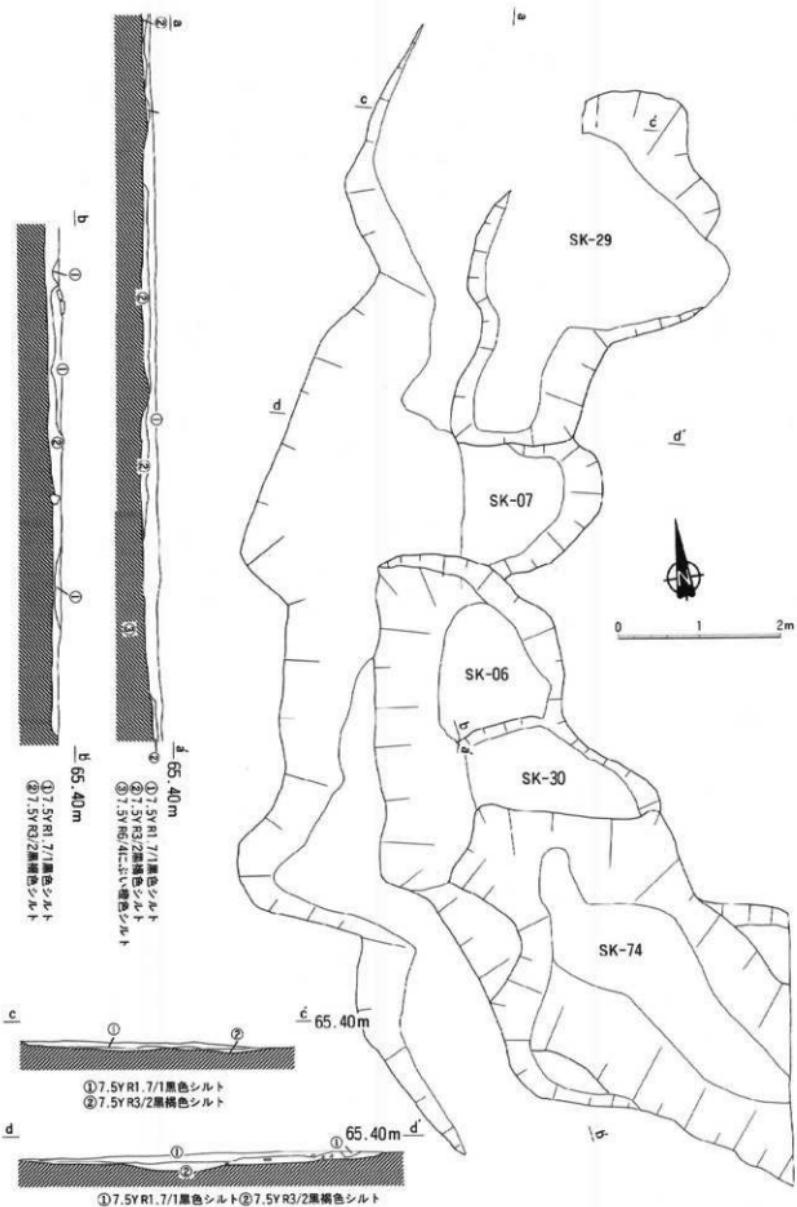
第11図 梅原安丸II遺跡の地形と区割図 (1/2,000)



第12図 梅原安丸II遺跡3地区遺構図(1) (SB-01は1/80、SK-01は1/40)



第13図 梅原安九II遺跡3地区遺構図(2) (1/40)



第14図 梅原安丸II遺跡3地区遺構図(3) (1/40)

- b 井戸** SK-50は直径80cm、深さ1.36mである。地山を掘り抜き下の礫層に達している。
- c 壁穴状遺構** (第12図) SK-01は平面2.8×2.6m、深さ30cmの壁穴状の遺構である。中央部には地山を掘り残した部分がある。遺物の出土は無いが、中世遺構と考えられる。
- d 穴** (第12・13図) 比較的新しいと考えている黒色土主体の埋土の穴 (SK-01・72) と灰褐色土主体の縄文時代に属すると考えられる穴 (SK-05・31・32・90・141) に分けられる。SK-05は径1.2~1.4m、深さ30cmの穴で骨片が出土している。SK-31・32は上器溝に近接し、その一部となる可能性がある。埋土内からは、縄文土器・石器が出土している。SK-90・141は下崩遺構である。
- e 溝** (第13図) SD-23は深さ60cm前後で、断面が「V」字形を呈する。また、部分的に途切れ陸橋状になる。
- f 土器溝まり** (第14図) SK-29・07・06・30・74は当初、別々の穴とみられたが、遺構間の切り合いが認められず、一連の遺構で土器を多量に出土したことから、土器溝まりとした。規模は検出した部分で、長さ14m・幅2~4.7m・深さ20~40cmである。埋土は①層黑色シルト・②層黒褐色シルトを主体とする。
(岡本)

B 遺物

a 縄文土器

X 445~460・Y 46~50地区の土坑出土の遺物を中心に記述する。(SKと表現するが、土器溝まり解釈すればすべて包含層になる可能性もある)

SK-5 (第15図1、図版16の1) 波状口縁の深鉢で口縁は「く」の字形、三条の沈線をめぐらすもの。

SK-6 (第15図2~18、図版16の3、図版17の1) 波状口縁となる深鉢で口縁部に2~3条の沈線をめぐらし、波状の形態は山形又は台形状を呈すもの。口縁は「く」の字形、口縁部に縦位置に隆帯を貼付け、沈線を構成し、口唇部には縄文が施文されるもの。口縁は「く」の字形、口縁部に六条の沈線がめぐり、その上下に連続に刻み目を施すもの。

三条の平行沈線帯で構成、その沈線帯の交点には円形の刺突があるもの。縄文、又は無文の鉢類。柄状把手をもつもの。注口土器などが出土している。

SK-7 (第15図19~35、図版17の1) 波状口縁となる深鉢で波状の形態は台形状を呈し、沈線を口縁部に引くもの。浅鉢で三条の幅広沈線。各々の沈線上に扁状貝設置痕文が施文される(口縁部は内屈するものと、直立立ち上がるものがある)。口縁部に山状の突起があり口縁の沈線間に棒状工具による連続刺突があり脇部には羽状縄文を施文するもの。羽状縄文に瘤をもつもの。縄文施文の深鉢で、口唇部に縄文のあるものなどなどが出土。

SK-29 (第16図1~4・6~8、図版16の2) 浅鉢で口縁部が「く」の字形、口縁に細い刻み目二条の幅広沈線のあるもの。深鉢で、口縁部に一条の隆帯(縄文による圧痕)脇部は縄文施文などが出土。

SK-30 (第16図19~44、第17図1~16、第18図4、第20図5・6、図版17の2・3、図版19の1、図版20の4、図版21の2) 鉢でくびれ部に刻目があり、脇部の羽状縄文を磨消すもの。深鉢で口縁より羽状縄文を施文するもの。

口縁部の縦位置に隆帯を貼付け、沈線を構成するもの。口縁は「く」の字形で口縁部に六条の沈線がめぐり、その上下に連続の刻目を施すもの。口縁は「く」の字形、五条の沈線を引きその上下には縄文を施し沈線上には円形刺突文を持ち、口唇部には縄文を施文するもの。浅鉢で三条の幅広沈線を持つもの。波状口縁となる深鉢で口縁に二~三条の沈線をめぐらすもの。波状口縁の深鉢、口縁部から脇部に四条の沈線、脇部には三本三単位の沈線を二段めぐらし、各沈線の各々に捺円形圧痕文を配するものなどがある。

SK-31 (第16図9~17、図版16~2) 口縁部に平行沈線の縄文帯に米粒状の刺突をし、裏面にも平行沈線間に円形刺突をするもの。深鉢で縄文を施文し、口唇部にも縄文を施文し裏面の口縁には指頭圧痕があるもの。深鉢で口縁部が二条の平行沈線の無文帯を構成するもの(口縁部が「く」の字状になるものもある)。口縁が「く」の字形、口縁・口唇部にも縄文を施文するものなどが出土。

SK-74 (第17図17~37、第18図5・7・10、第20図1、図版18の3、図版19の1、図版21の1) 口縁部に縄文施文し、口縁が「く」の字形と直立するもの。深鉢で二条の幅広沈線。縄文施文の深鉢。胴部に刻目の隆帯に瘤のつくものの。深鉢で口唇部を指頭圧痕をし縄文を施文するもの。小突起をつける波状口縁の深鉢で、口縁帶には沈線が施文され沈線下に、わずかに縄文が残り、胴部文様は磨文線文などが出土。

包含層出土土器

① 口縁部に突起、又は隆帯を持つもの (第18図1~16)

- ① 口縁部は「く」の字形をし、②口縁に隆帯を擬位置（頸部が無文）と③斜方向（頸部が縄文）に貼付けるものがある。隆帯の幅は0.2~0.8cm、隆帯の間隔0.5~3cmのものがある。④は3、4~8、10 ⑤は9、11、15、16 (15は浅鉢) ⑥口縁部はやや「く」の字形、口縁部に突起を貼付ける。1の突起の直径は0.7cm、高さは0.5cm、胴部は縄文を施文。

2 の突起の直径0.7cm、高さは0.3cm頸部は無文、13は直径1.2cmの円形の突起（指頭？）を貼付ける。14は口縁部は「く」の字形、口縁部に直径0.3cmの円形突起を三段貼付け、頸部に2列の隆帯をつける。

- ⑥ 幅広沈線を持つもの (第19図23~33) 平縁の鉢が多く、口縁に二~三条の幅広沈線（〔橋本他1980〕の提唱による）を持つもの、胴屈曲部に三条の幅広沈線を持ち各々の幅広沈線に巻貝による肩状圧痕を施すもの (第20図7)などがある。

- ⑦ 晩期 (第20図9~11) 口縁が「く」の字に外反する深鉢で全体に条痕を施文するもの。沈状の口縁部を持ち、11唇部に指頭圧痕をし、器面は縄文を施文するものがある。

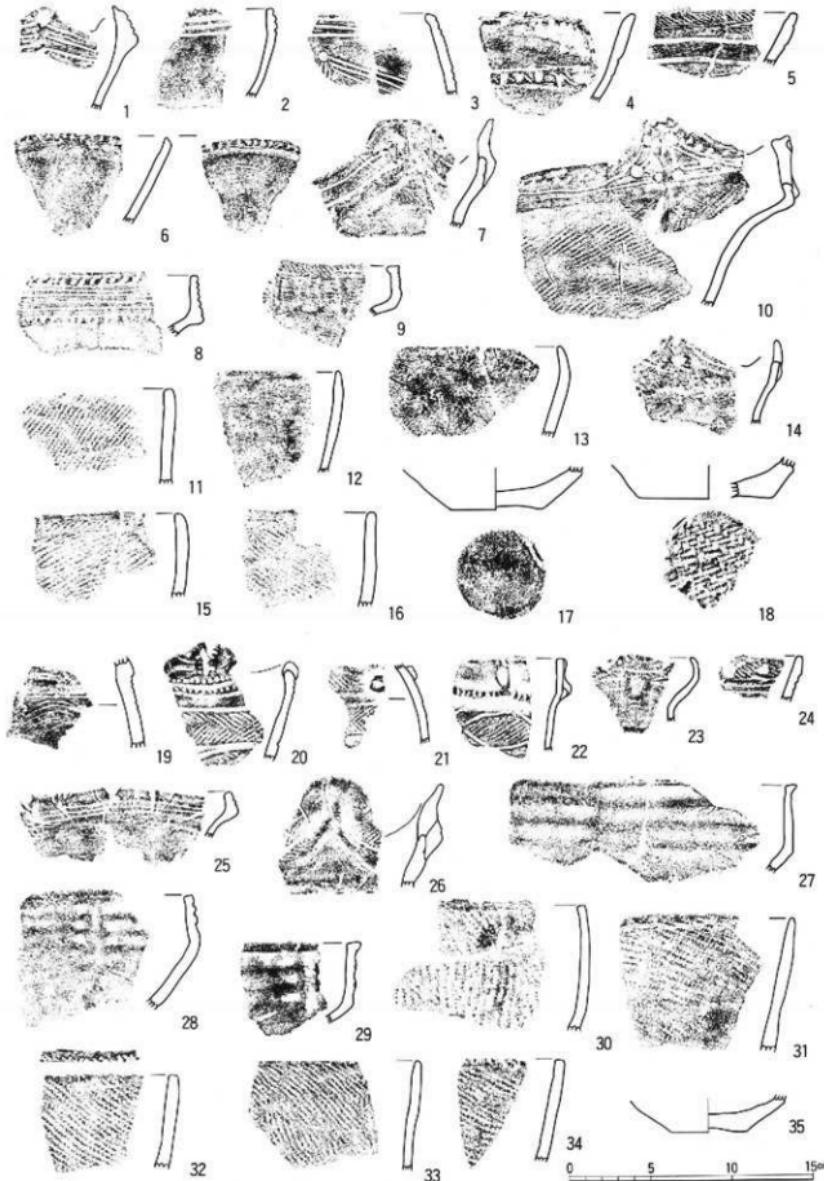
- ⑧ 小型土器 (図版21の8~10) 3点出土

以上、拓影図および写真で示した土器は、北陸の後期後半、酒見式〔高振1965〕、井口式〔小島1966〕、井口第1~Ⅲ期〔橋本他1980〕の範囲に含まれる土器群である。尚諸般の事情により、掲載できなかった資料なども数多く、これらは発掘物の一部であることを明記いたします。

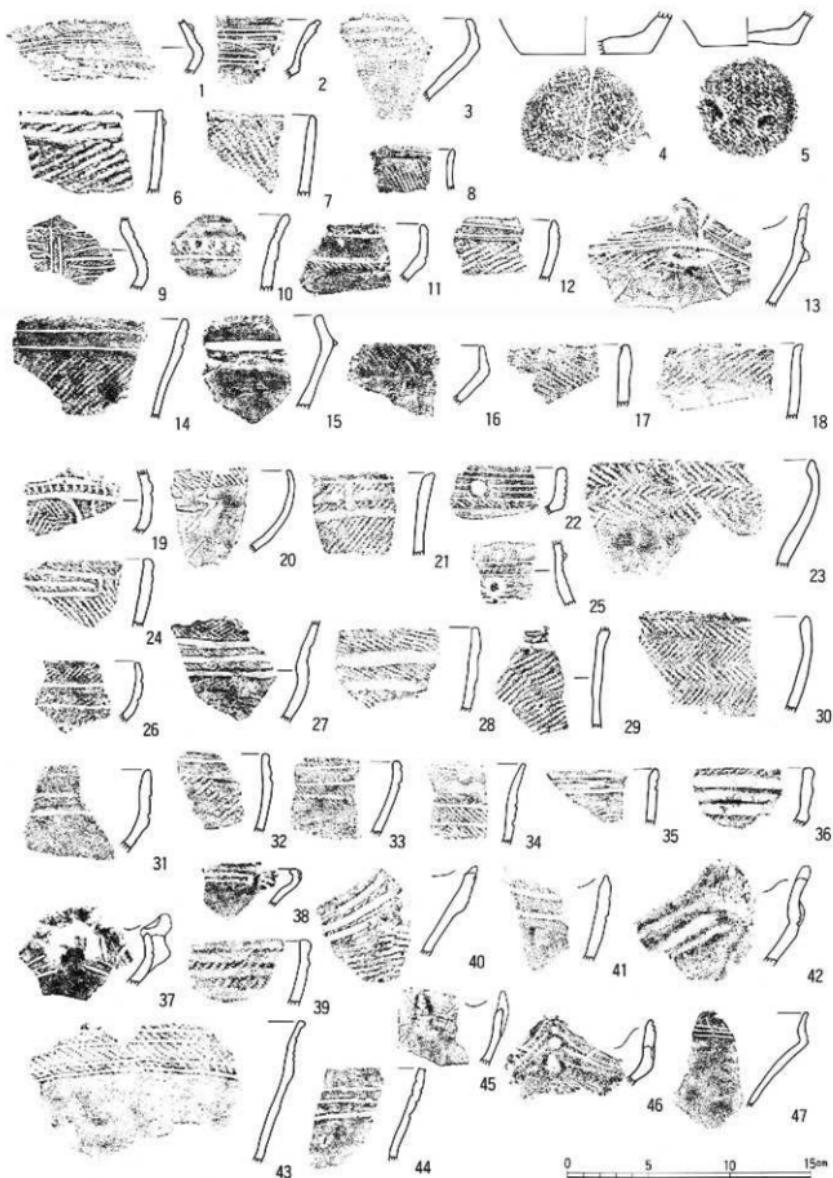
(齊藤)

縄文時代関係引用・参考文献

- ア 麻生謙・市原壽文 1961 「西貝塚」 磐田市教育委員会
麻生謙 1962 「磐坂遺跡絆括縦土器一」 浜松市教育委員会
イ 市坂謙夫 1974 「酒見新立遺跡」 「富楽町史 資料編」 富楽町役場
伊佐智法 1991 「V梅原加賀遺跡の調査2 B地区」 「東海北陸自動車道発掘調査概報(2)」 財团法人富山県文化振興財團
オ 往藤久雄 1991 「富山市福光町うづら山遺跡緊急発掘調査概要」 福光町教育委員会
カ 堀内光次郎・西野秀和・本田秀生 1985 「鶴来町白山遺跡・白山町遺跡(II)」 石川県立埋蔵文化財センター
狩野豊・酒井重洋 1991 「北陸自動車道遠鉢調査報告書ー朝日町編6ー」 岐阜A遺跡土器編 富山県教育委員会
キ 片岸雅敏・酒井重洋・宮田進一・久々忠義 1982 「東中江遺跡」 富山県平村教育委員会
コ 小島俊彰 1966 「東砺波郡井口遺跡出土遺物の紹介」 「大焼 第2号」 富山考古学会
小島俊彰・崎谷政子 1976 「勝木原遺跡」 富山県立高岡・立山高校地歴クラブ
小島俊彰 1979 「木立遺跡」 「滑川市史-考古学資料編ー」 滑川市
小島俊彰 1981 「井口式土器」 「縄文文化の研究4 縄文土器目」 雄山閣
サ 酒井重洋 1987 「井口村井口遺跡出土の縄文晚期の土器」 「大焼 第10号」 富山考古学会
神保篤造 1980 「富山県福光町竹林遺跡」 「金沢市立埋蔵文化財センター」 福光町教育委員会
末永雄輝 1994 「南郷の遺跡」 「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書15」
高塙勝喜・藤則雄・滋井真・山本直人・吉田裕雪・川端數子・河村裕子・辻尋由美子 1983 「野々市市町御絞跡」 野々市市教育委員会
高塙勝喜 1964 「金沢市近郊八日市新保並びに御絞堺遺跡の調査」 「押野村史」
高塙勝喜・宮岸久司・塙野秀章・米沢義光・湯尻修平 1976 「野々市市町御絞跡調査(第8次)」 機報 石川県教育委員会
高塙勝喜・西野秀和 1983 「上田うまばち道路」 押野村市教育委員会
高塙勝喜編 1983 「野々市町御絞跡」 野々市市町教育委員会
出崎政子 1969 「北陸地方の縄文時代晩期について(1)」 「大焼 第3号」 富山考古学会
ナ 中司膳世・中山修宏・平井典子 1977 「庵谷本町遺跡」 勝山市教育委員会
ニ 西野秀和 1989 「第5章 出土遺物 第1節 土器 第8章 考察 第2節 後・晩期の土器編年」 「金沢市米泉遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
ハ 横本正・酒井重洋・久々忠義 1980 「富山県井口村井口道路発掘調査概要」 井口村教育委員会
平田天秋・市垣元一・宮下栄仁・西野秀和 1988 「前町道下元町遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
増子康真 1971 「室屋遺跡」 「下小島ダム開館係埋蔵文化財時調査報告書」 河合村教育委員会
浅澤 1972 「縄文時代後・晩期」 「富山県史」 一考古編
柳井睦・池野正男・久々忠義 1977 「富山県大泽町布引遺跡緊急発掘調査概要」 大沢町教育委員会
山本直人・松山和章 1987 「福岡遺跡」 河内村教育委員会
山本正敏・林浩明 1990 「安居五百歩遺跡」 (縄文時代編) 福野町教育委員会
ユ 堀尻修平・吉田裕雪 1977 「加賀郡横北遺跡発掘調査報告書」 石川県教育委員会

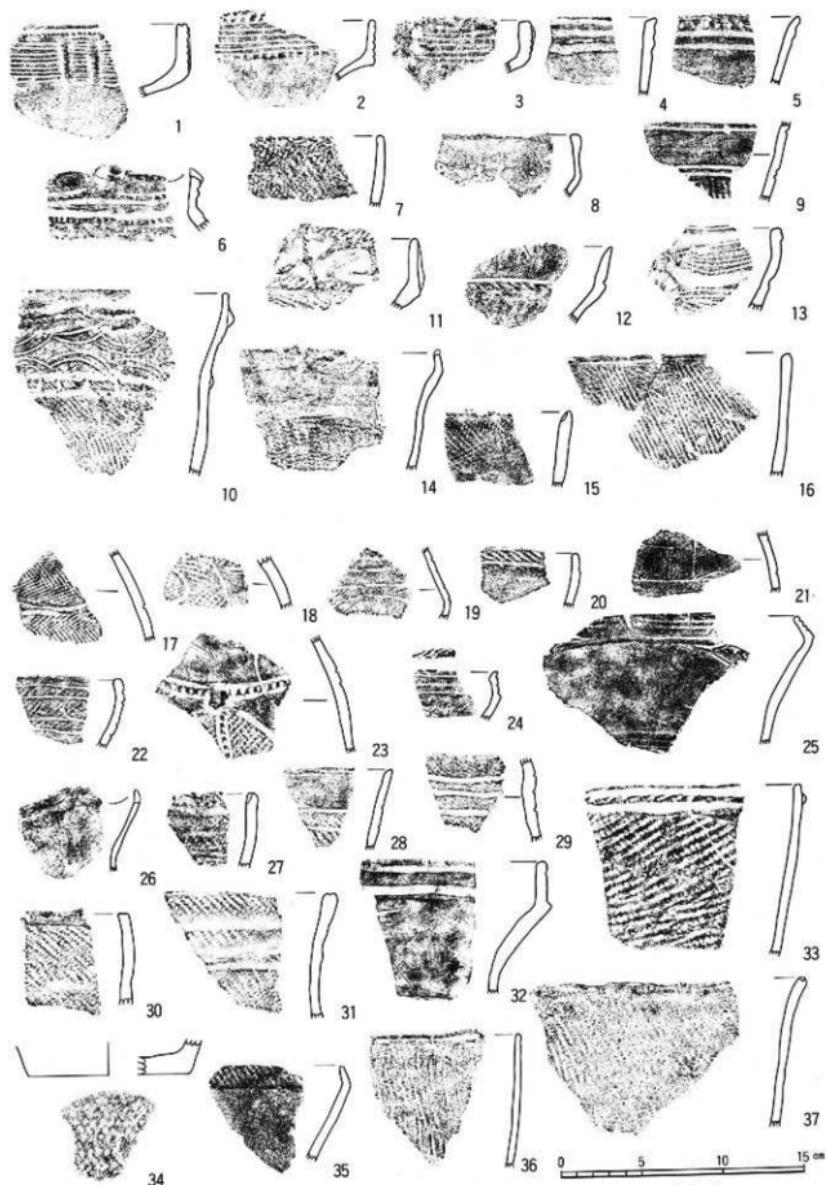


第15図 梅原安丸II遺跡3地区出土遺物拓影図(1) 1 (SK-5), 2 ~18 (SK-6), 19~35 (SK-7) (1/3)



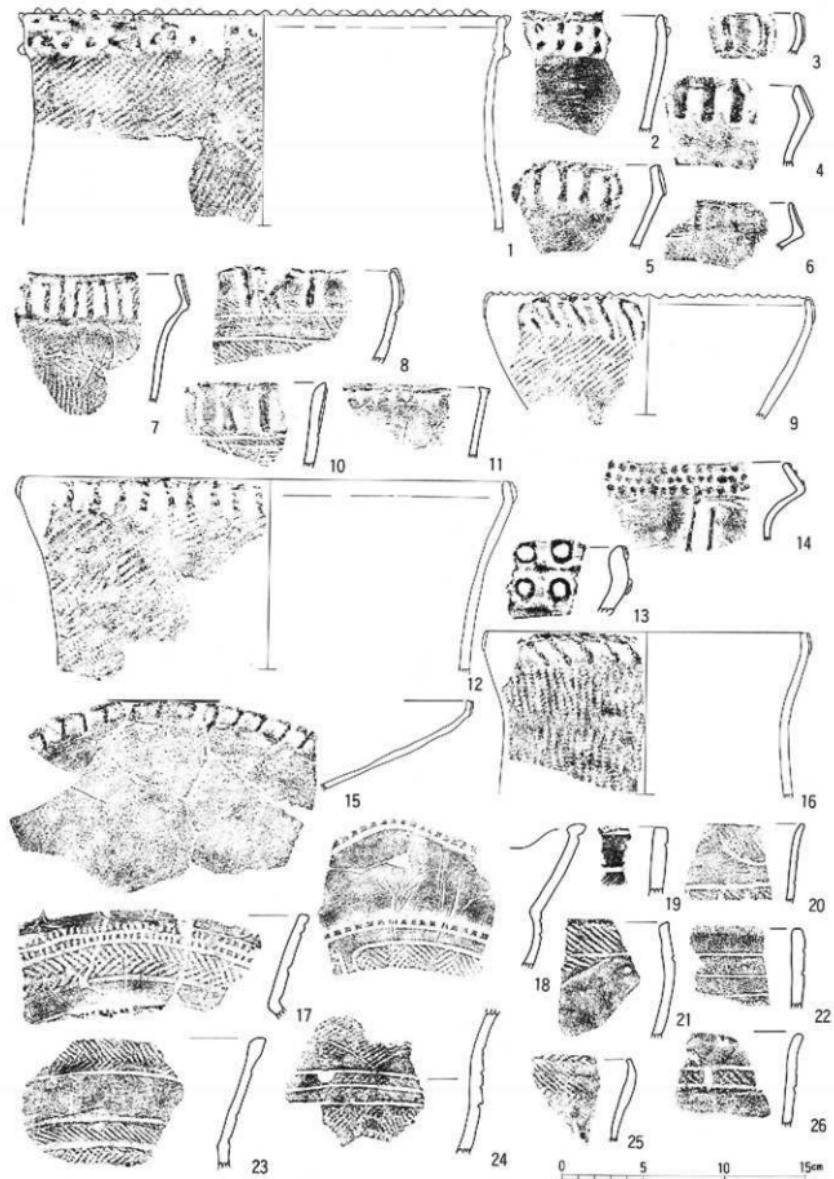
第16図 梅原安丸II遺跡3地区出土遺物拓影図(2)

1~4・6~8(SK-29)、5・9~17(SK-31)、18(SK-32)、19~44(SK-30)(1/3)

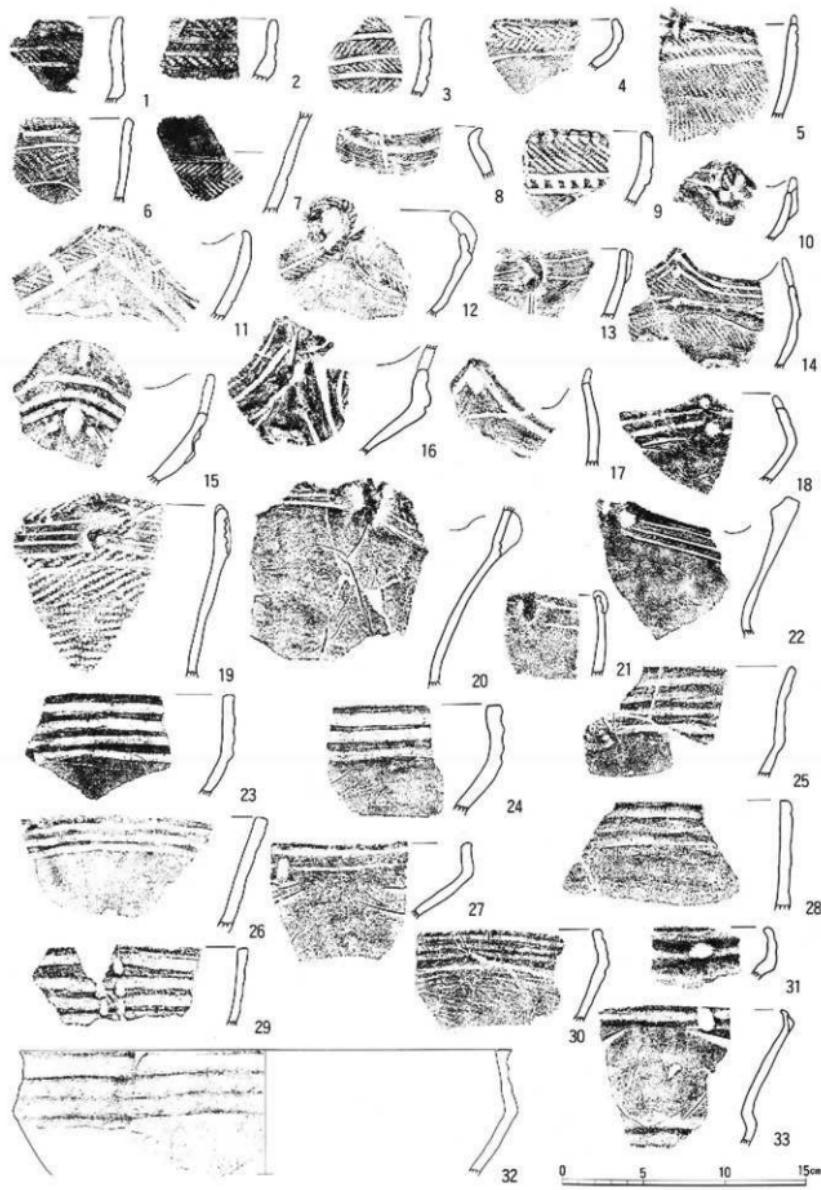


第17図 梅原安丸II遺跡3地区出土遺物拓影図(3)

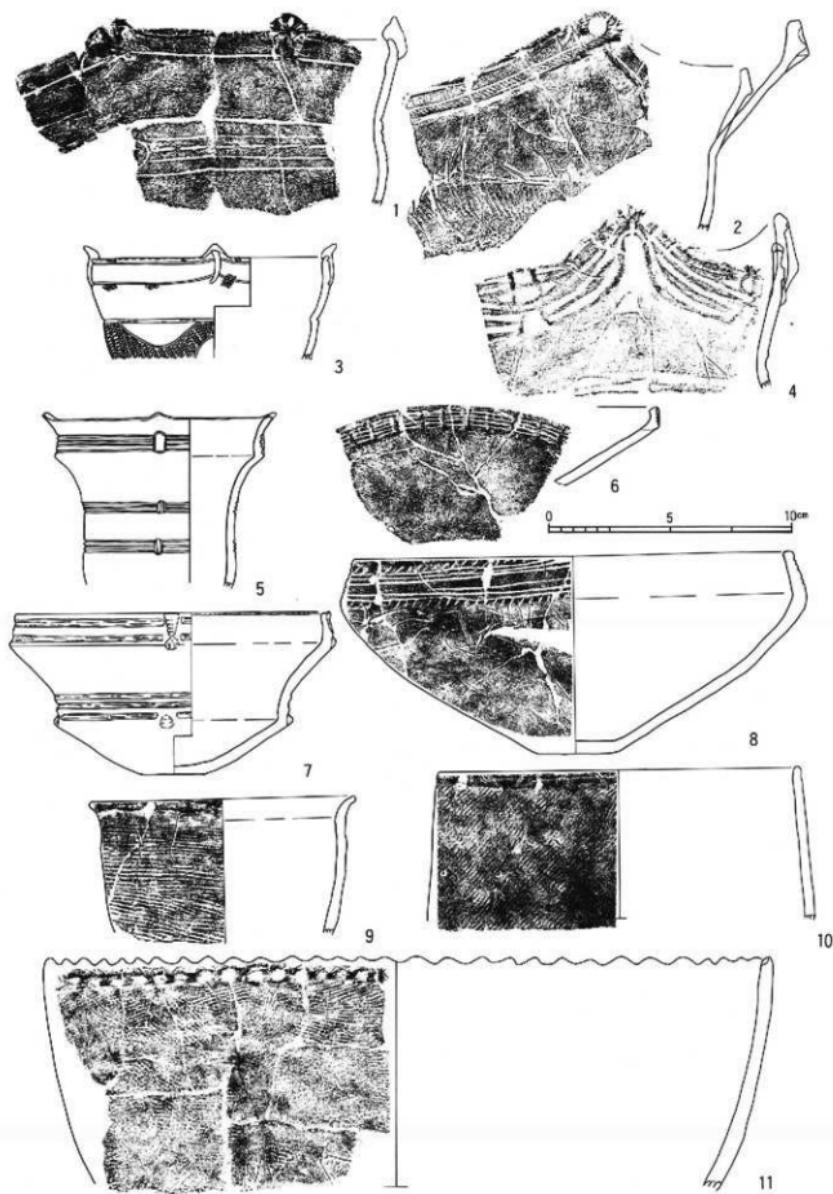
1-16(SK-30)、17(SK-70) 18-37(SK-74) (1/3)



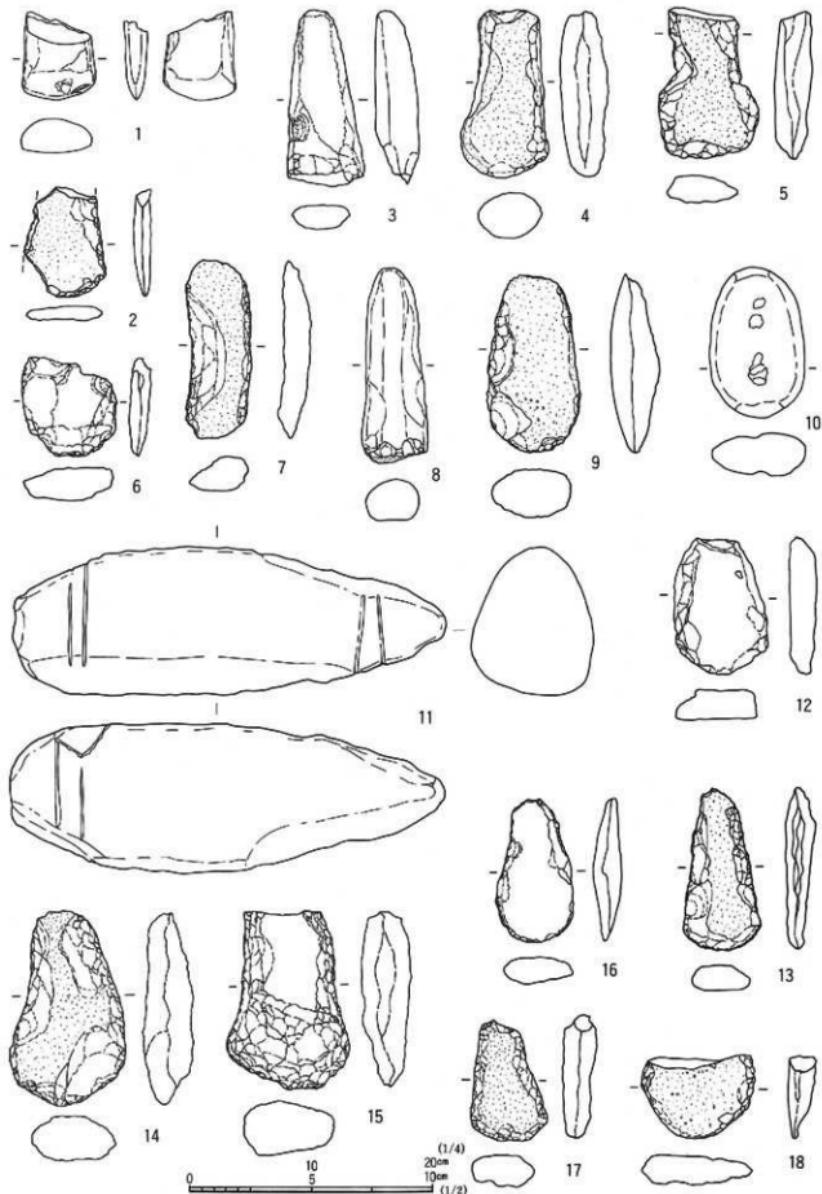
第18図 梅原安丸II遺跡出土遺物拓影図(4) 4(SK-30)、5・7・10(SK-74)、16(SK-99)、1-3・6・8・9、11-15、
17-26(包含層)(1/3)



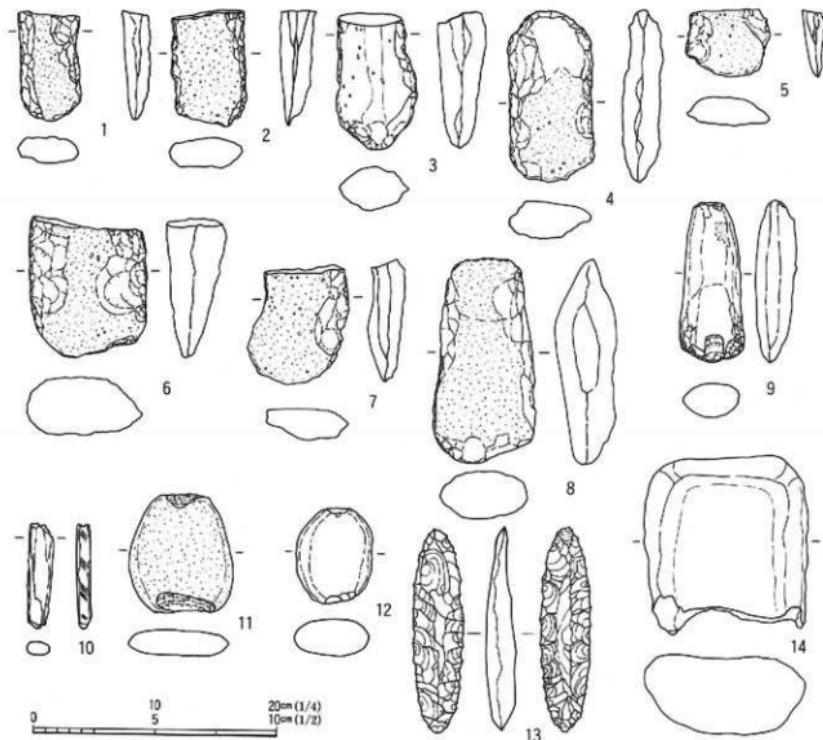
第19図 梅原安九II遺跡3地区出土遺物拓影図(5) 1~33(包含層)(1/3)



第20図 梅原安丸II遺跡3地区出土遺物実測図・拓影図(6)(1/2) 5(SK-30)、1~4・6~11(包含層) (1/4)



第21図 梅原丸II遺跡3地区出土遺物実測図(?) (1/4, 11のみ1/2) 1・2(SK-27), 3・4(SK-7), 5(SK-6),
6・7(SK-30), 8~10(SK-74), 11(SK-32), 12(SK-70), 13(SK-5), 14~18(包含層)



第22図 梅原安丸II遺跡3地区出土遺物実測図(8) (1/4, 13のみ1/1)

b 織文時代の石器 (第21・21図、図版22の1・2、図版23の1・5~7)

出土した石器には磨製石斧・打製石斧・凹石・敲石・石錘・石皿・石鑿・石冠などが見られ、量的には打製石斧が多く、他は1~3点程度であり、出土した3分2程度は包含層出土。

磨製石斧 (第21図1・3、第22図9、図版22の2・3) 3点出土。1は刃部のみでSK-29出土、石材は流紋岩 (淡飛流紋岩) 3は刃部欠損SK-7出土、石材は安山岩、9は包含層出土石材は凝灰岩 (緑色凝灰岩)

打製石斧 (第21図2・4~7・9・12~18、第22図1~8、図版22の2・3) 26点出土。形態的にはいわゆる短骨形、撥形、分銅形 (第21図5) がある。石材はピン岩、閃綠岩・流紋岩・安山岩・砂岩など多種ある。

凹石 (第21図10、図版22の2) 1点。SK-74出土、両面に2~4の凹を有する。石材は安山岩。

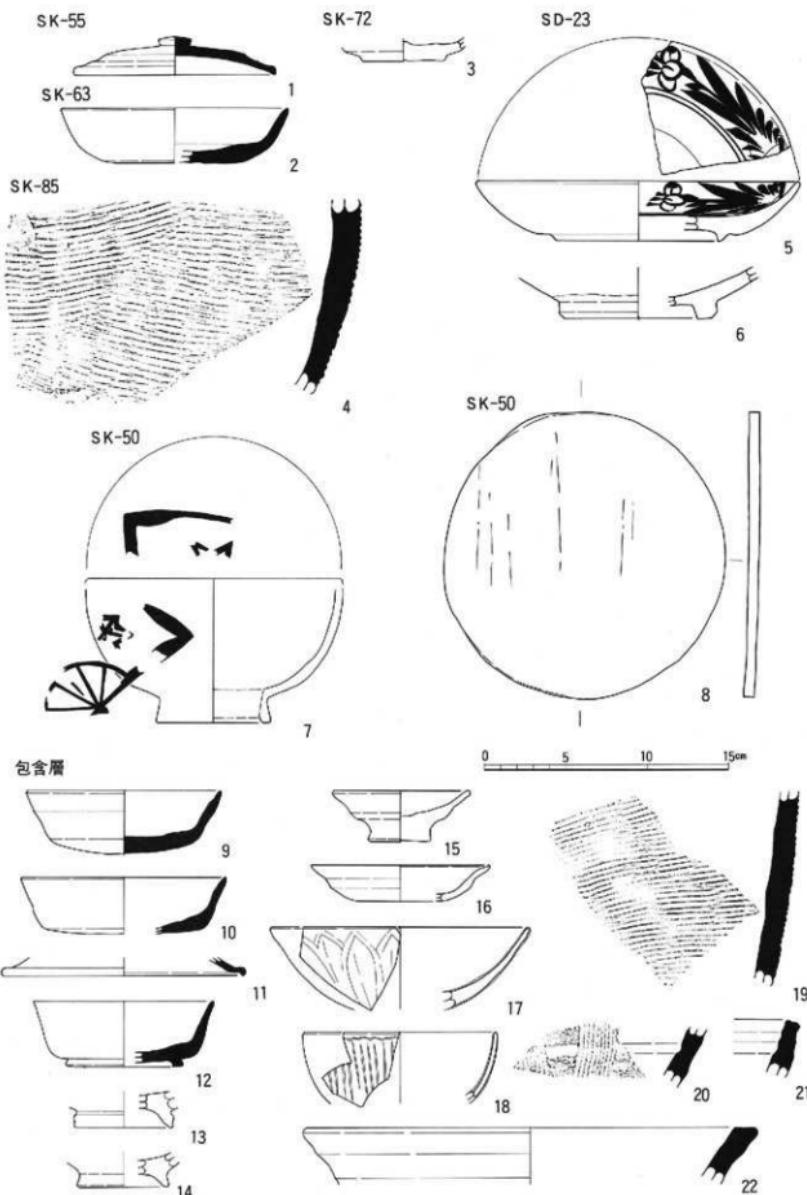
敲石 (第21図8、図版23の6) 1点。磨製石斧の様に加工され先端敲打痕がある。SK-74出土、安山岩。

石錘 (第22図11・12、図版23の6) 2点。包含層、礫の長軸の両端を打欠き、又は敲打。重量は各260gと270g。

石皿 (第22図14、図版23の7) 1点。SK-74出土、半欠品。石材は閃綠岩。

石鑿 (第22図13、図版23の5) 1点。包含層、長さ4.1cm、重量2.5g。尖基鑿、石材は流紋岩 (緑色凝灰岩系)

石冠 (第21図1、図版23の1) 1点。SK-32出土。両端に二本の沈線、石材は凝灰岩 (泥岩)



第23図 梅原安丸II遺跡3地区出土造物実測・拓影図(9) (1/3)

c 古代以降の遺物（第23図）

SK-55出土遺物（1） 1は須恵器杯B蓋である。法量は口径12.2cm、器高2.3cmである。端部は巻き込む形態。

SK-63出土遺物（2） 2は須恵器杯A。法量は口径13.8cm、器高3.4cm。底部外面はヘラキリ後、ナデをする。

SK-72出土遺物（3） 3は土師器碗底部かと考えられる。法量は底径5.0cmである。底部はイトキリをする。図示した以外にも土師器細片がある。

SD-23出土遺物（5・6） 5は肥前系の磁器。6は瀬戸内内・外面に灰釉が施される。

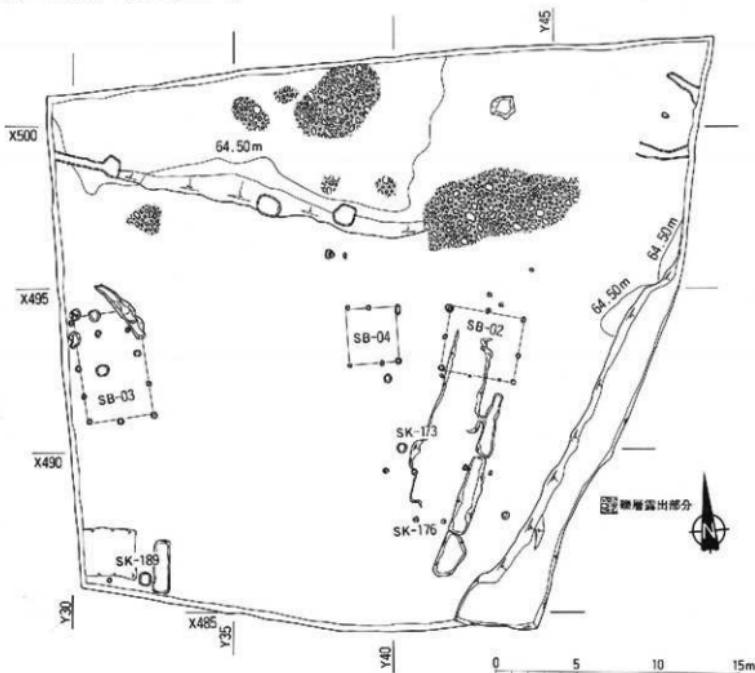
SK-50出土遺物（7・8） 7は総黒色漆器碗で内底面及び外面には花を描いた扇子を赤漆で表現する。久々氏の編年【久々1986】ではⅡb期、四柳氏の編年【四柳1991】では罹期の資料に類似する。8は柄の底か。

包含層出土の遺物（9～22） 9～12は須恵器で、8～9世紀の時期幅の内に納まると思われる。13～15は土師器。

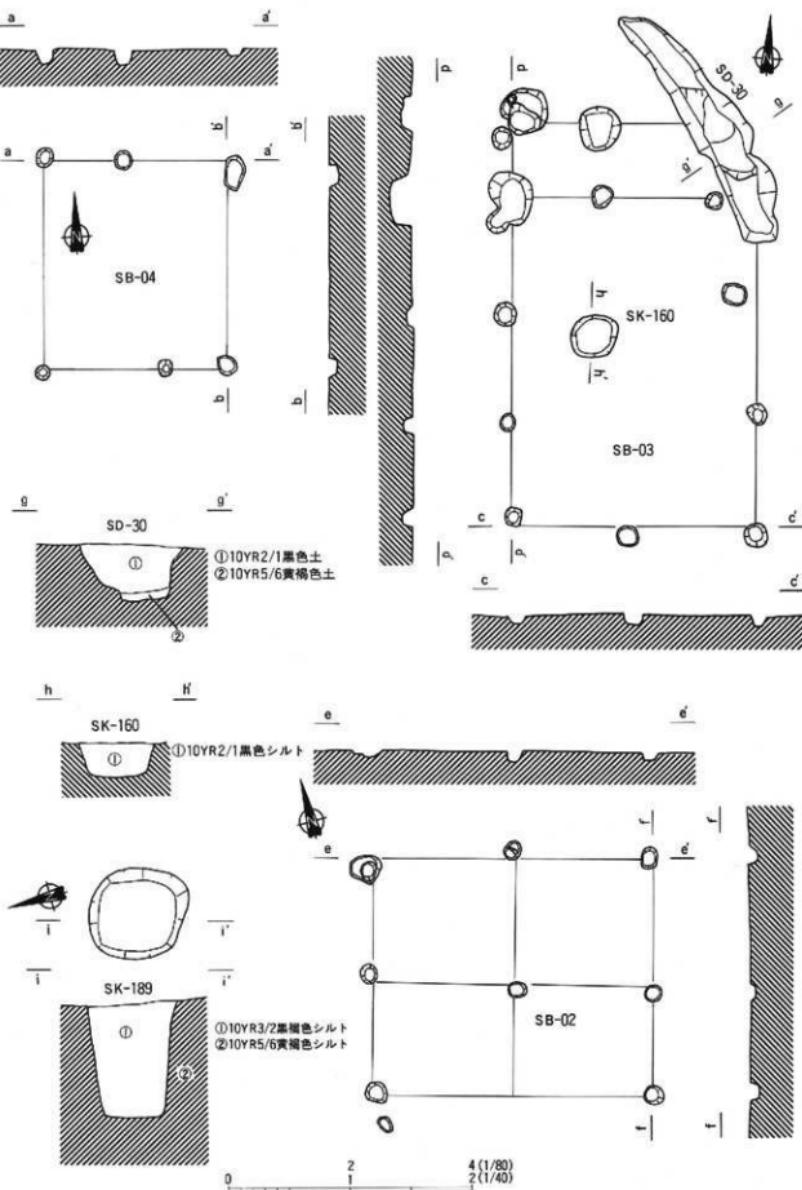
13・14は内面黒色の有台碗で10～11世紀とみられる。15はSB-01周辺の出土の円柱状底部の皿で小矢部市桜町遺跡舟岡地区出土の11世紀後半の遺物【伊藤1990】に類似する。16は体部が強く外反し口縁端部を摘み上げる。17・18は青磁。17は13世紀末～14世紀初頭、18は15世紀末～16世紀初頭【上田1982】とみられる。19～22は珠洲。（岡本）

(2) 4地区の調査（第24図・図版5の1）

調査対象地は遺跡の北側部分に係る田面調整工事予定地である。発掘面積は1,240m²で、台形をしている。Y軸はN-4.5°-Eである。標高は表上面で64～65mで、北側が水田の地割りの関係で低くなる。低い部分は地山の厚さは薄く所々に地山下の疊層が露出する。



第24図 梅原安丸II遺跡4地区造構配置図 (S=1/300)



第25図 梅原安丸II遺跡4地区構造図 (SBは1/80、他は1/40)

A 遺構 (第25図、図版7の1~3・8の1)

据立柱建物、井戸、穴を検出した。

a 据立柱建物 (第25図、図版7の1~3)

SB-02 東西棟で南北2間×東西2間の縦柱建物である。柱間寸法は桁行が2.3+2.3mで、梁行が2.3+1.8mである。柱穴は直径30~40cmで、深さは20~30cmである。建物方位はE-14.5°-Sである。

SB-03 南北棟で南北3間×東西2間の建物である。柱間寸法は桁行が1.6+1.6+1.6mで、梁行が2.0+1.6mで、北面に庇がある。柱穴は直径20~90cmで、深さは20~30cmである。建物方位はN-4°-Wである。北東隅の柱穴は溝状の穴 (SD-30) になっている。住居内には皿上の穴 (SK-160) がある。

SB-04 南北1間×東西2間である。柱間寸法は南北が3.4mで、東西が1.3+1.6mである。柱穴は直径30~40cmで、深さは20~30cmである。建物方位はN-3°-Eである。

b 井戸 (第25図、図版8の1)

SK-189 直径80cm、深さ90cm

の素堀の井戸である。

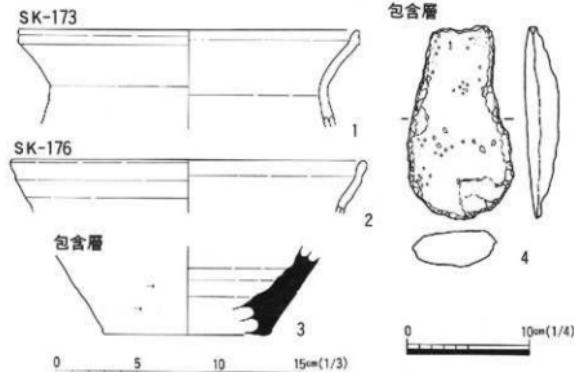
B 遺物 (第26図)

遺物の出土は少ない。遺物の中心となる時期は9~10世紀と考えられる。

SK-173 (1) 口縁部は途中で折れ直立する。

SK-176 (2) 口縁部は巻き込み断面は薄くなる。

包含層 (3・4) 須恵器壺底部縄文時代の打製石斧4が出土している。
(岡本)



第26図 梅原安丸II遺跡4地区出土遺物実測図 (1/3、4のみ1/4)

6 梅原安丸II遺跡 (第27図)

今年度の調査は田面調整工事予定地1箇所と幹線道路予定地1箇所の2箇所である。昨年度は4地区に接して調査をしている〔神保1991〕。遺跡は標高66~68m付近に立地する。発掘区割のY軸はN-4°-Wである。

(1) 3地区の調査 (第28図、図版11の1)

調査対象地は梅原安丸II遺跡の北側部分に係る田面調整工事予定地である。発掘区は南北20m、東西25mの方形である。標高は表土上面で66.5mである。東側はシルト質の地山であるが、西側は砂質となっていた。

A 遺構 (第29図) 溝と谷部と大正期の耕地整理後の新しい擾乱穴 (SK-01) を検出した。

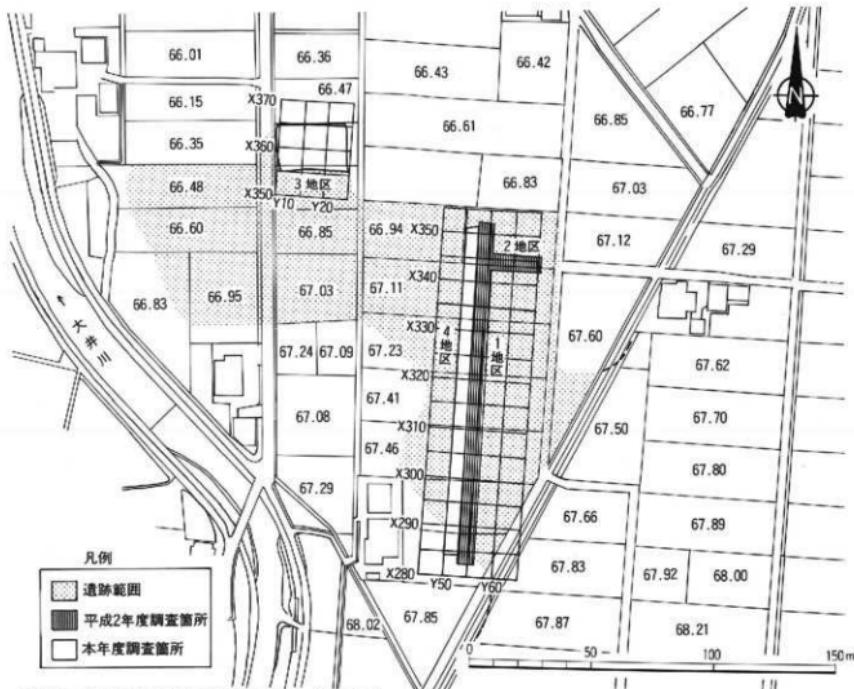
SD-01は幅70cm前後、深さ15cmの溝で、発掘区南東角から北東角に延びる。谷部は発掘区南西から北側中央付近に広がり、幅5~6mで黒色系のシルトが堆積する。遺物は埋土中より縄文土器・石器が数点出土した。
(岡本)

B 遺物

a 縄文土器 (第30図1~15、図版23の13・14、図版24の1)

今回調査で出土した縄文土器は、発掘区中央に確認された谷部出土が大半であり、後~晩期が主である。

1は縄文施文の深鉢胴部破片。2は深鉢の口縁部、縦方向の縄文を施文。3は鉢の口縁部、羽状縄文を施文。4は深鉢、口縁部に縄文、口辺部に平行沈線を引く。8は深鉢、口縁部は斜め方向、胴部は縦方向に縄文を施文する。



第27図 梅原安丸III遺跡の地形と区割図 (1/2,000)



第28図 梅原安丸III遺跡3地区遺構配置図 (1/300)

9は条痕を施す。10は浅鉢・磨消し縄文と三叉文が文様要素となっている。11は注口土器の注口部のみで、注口部への施文ではなく、この先端は多少上向きである。12・13は深鉢・口縁部、14・15は深鉢・縄文を施す。時期は3は酒見式（井口第一期）、8は気屋式、10は御経塚式である。尚気屋式土器は竹林I遺跡〔神保1980〕、梅原出村III遺跡（本書）などに確認され、安居五百歩遺跡では比較的、握った資料が報告〔山本他1990〕。晚期前半は、うずら山遺跡〔往賀1991〕、梅原加賀坊遺跡B地区〔伊佐他1991〕などで確認。

b 縄文時代の石器（第3図16～18、図

版23の10・11) 打製石斧が3点、包含層より出土。形態的には短冊形と撮影に分類され、石様は16-砂岩、17-ヒン岩、18-流紋岩である。(斎藤)

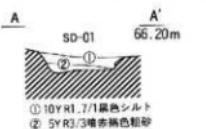
c 古代以降の遺物 (第30図19-22)

古代以降の遺物には谷部付近と搅乱層から出土しており、須忠器・青磁・珠洲があるが、遺物量は少ない。

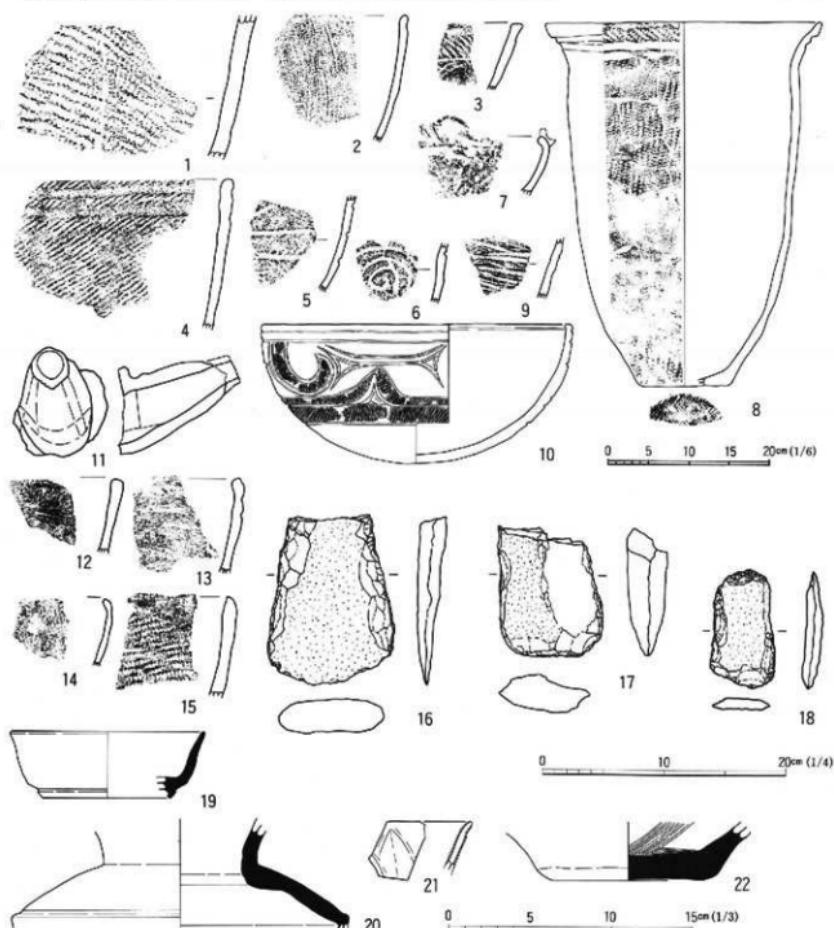
19は8世紀代と考えられる杯口身で、口径11.8cm・台径7.8cm・器高4.2cmである。底部はヘラキリ後ナデる。20は壺の頸から肩部で、頸部径は9.5cm、体部最大径20.8cmである。

20は青磁で13世紀頃〔上田1982〕の壺と考えられる。22は珠洲の鉢である。

(岡本)



第29図 梅原安丸III遺跡3地区遺構図
(1/40)



第30図 梅原安丸III遺跡3地区出土遺物実測・拓影図 (1/3, 8は1/6, 16~18は1/4)

(2) 4地区の調査(付図、図版11の2・3)

調査対象地は梅原安丸Ⅲ遺跡の東側部分に係る幹線道路工事予定地である。発掘区は南北140m、幅6mである。標高は表十上面で67.5m前後である。工事の関係上4地区は昨年度の調査区と接しており第1号住居跡は2年度にまたがって調査をした〔神保1991〕。

A 造構(第31・32図、図版12・13-5-10)

古墳時代の堅穴住居跡のほか性格不明の浅い溝・穴を検出した。

a 第1号住居跡

昨年度の調査では住居跡の大部分を発掘し、今回の調査ではその西側部分を発掘した。昨年度〔神保1991〕の報告と重なる部分も多いが、ここに第1号住居跡の全体を合せて記載しておく。

規模は地山上面で南北軸5.0m・東西5.6m、周壁下で南北4.4m・東西5.0mで、東西にやや広い隅丸方形となっている。柱穴は4本主柱で直径25-30cm、深さ40-50cmである。柱穴の間隔は、P1-P2間が1.7m、P2-P3間が1.7m、P3-P4間が1.7m、P4-P1間が1.7mで、柱穴間を結んだ線は正方形となっている。都出氏の主柱配列方式〔都出1985〕では西日本に多い求心構造にあてはまる。住居跡の主軸はN-26.5-Wである。周壁の下には軸50cm、深さ5-10cm前後の溝がほぼ全周し周壁溝と考えられる。主柱穴以外には浅い2段に掘られた穴(P5・P6)と皿状の穴(P7)がある。P5は深さが30cmと深いが遺物は出土しておらずその性格については不明である。かび及び竈は検出していない。

遺物は殆どが北側の主柱外区から出土しており、床面から若干浮き上がっている(第32図)。これらの遺物は住居廃絶後若干の時間を経て一括廃棄されたと考えられる。

B 遺物(第33図、図版23の11・12・15、図版24)

出土遺物には縄文土器、第1号住居跡出土の土器類・砥石がある。

a 第1号住居跡出土遺物(第33図1-3)

土器器(1・2) 1は土器器壺である。口縁部は「く」字状にやや外反する。法量は口径19.6cm、頭部径16.3cmである。調整は内面横方向のハケメ、外面縦方向のハケメである。2は土器器鉢である。半球状の形態をし、口縁部は素縁である。法量は口径18.6cm・器高9.2cmで概より大きい。整形・調整手法は内面ハケメの後ナデ、外面ハケメ及びナデをするが、部分的に粘土接合痕が残る。

砥石(3) 長さ16.2cm・幅4.0cm・厚さ3.8cmの細長い形態である。4面に研ぎ面があり、線状の擦痕や光沢が観察できる。研ぎ面はよく使用されたためか、内凹する。石材は凝灰岩(珪質頁岩)である。

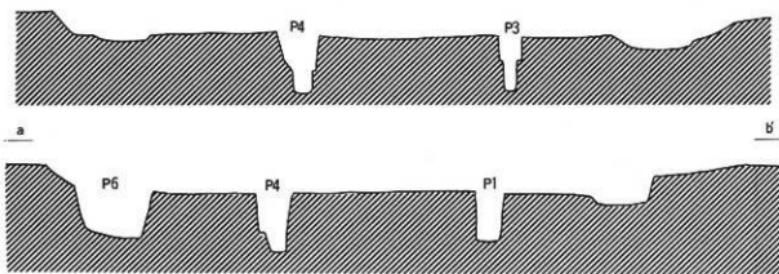
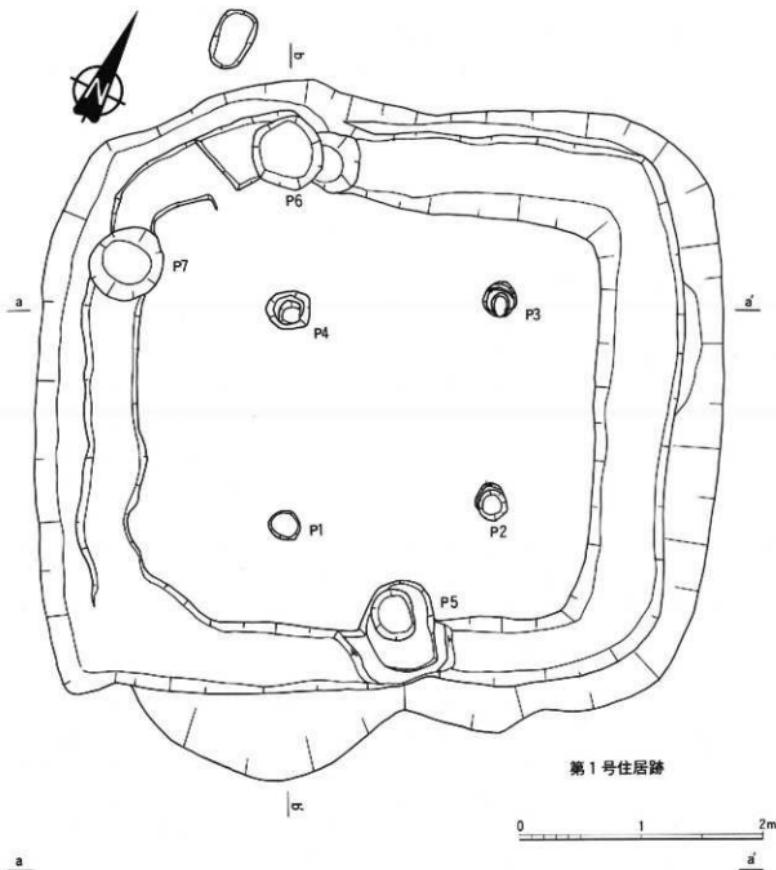
第1号住居跡出土土器群の組成(第32図) 第1号住居跡からは、同一時期と考えられる良好な一括遺物を検出した。器種は壺・高杯・碗・鉢がある。

壺は、その形態から球形胴のA類と長胴のB類の2種に分類した。A・B類はさらに整形・調整手法及び口縁部形態によりさらに分類できると考えられるが、今回は避けておく。A類は胴部最大径が口縁部を除く胴部の器高と同じかそれより大きい。B類は胴部最大径が、口縁部を除く胴部の長さよりも小さい。調整手法はハケメとケズリを組合せたものである。

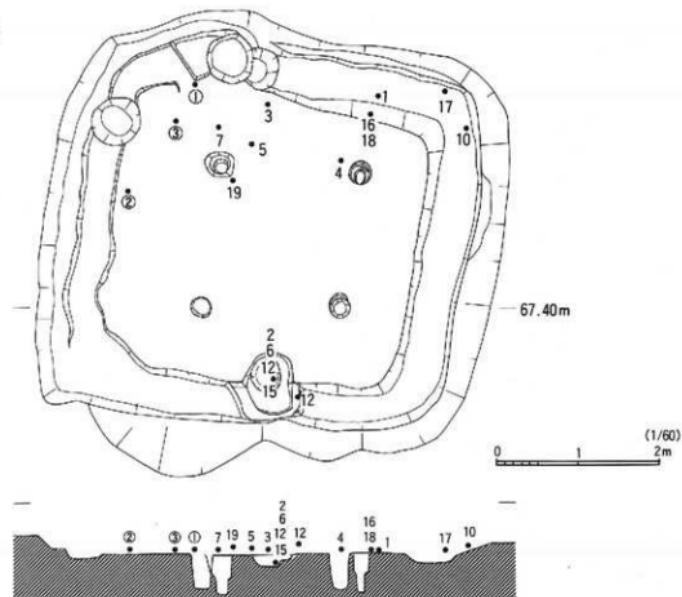
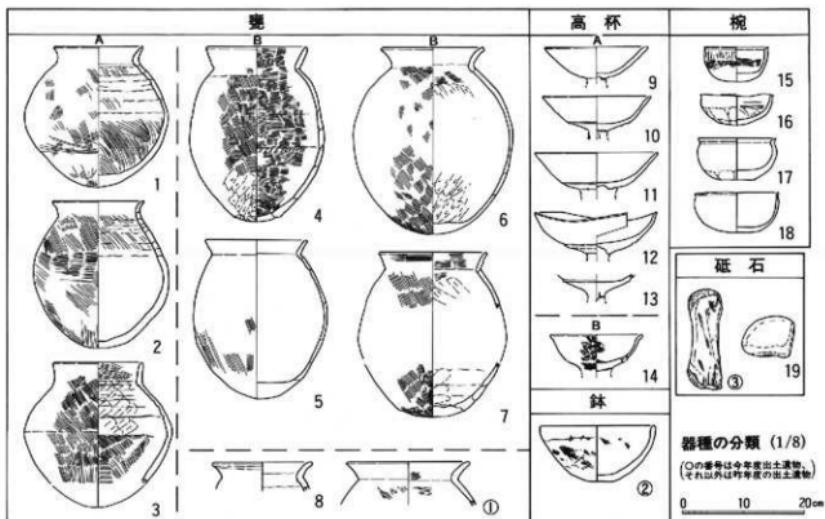
高杯は杯部のみが出土したため、杯部によって分類した。杯部が屈曲して立ち上がる形態のA類と湾曲気味に立ち上がるB類の2種に分類した。B類は内・外間にハケメが残っており粗雑なつくりである。

鉢は1点しか出土していないが、碗とは法量で分けた。

碗は4点出土している。法量差は認められるが、形態的には同一であるため分類しなかった。形態は、やや平底(?)及び丸底から立ち上がり、口縁端部に至り外反する。16は体部に粗いヘラミガキをする。

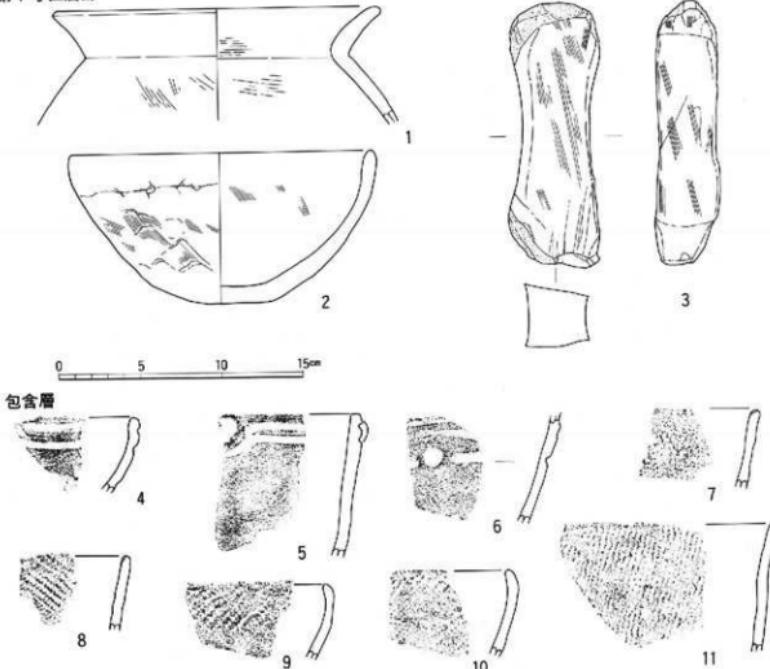


第31図 梅原安丸III遺跡4地区遺構図 (1/40)



第32図 梅原安丸III遺跡第1号住居跡出土遺物の分類と出土位置

第1号住居跡



第33図 梅原安丸III遺跡4地区出土遺物実測・拓影図 (1/3)

第1号住居跡出土の出土土器群に類似した土器群は県内では小矢部市道林寺I遺跡第3号住居跡〔上野他1978〕、小矢部市竹倉島遺跡〔山本他1978〕、小杉町北野遺跡第1・2号住居跡〔酒井他1987〕富山市境野新遺跡第1号住居跡〔藤田・橋本1984〕、富山市古沢A遺跡第1号住居跡〔藤田他1983〕、立山町若宮B遺跡S B 022・021〔狩野他1982・1984〕がある。

これらの土器群に對比してみれば、若干の差異はあるものの、道林寺I遺跡3号住居跡の組成に近いといえる。(岡本)

b 繩文時代の遺物 (第33図4~11、第34図、図版24-1)

調査区南側を中心に、全体まばらに縄文土器が出土。出土量は少なく土器のみ。土器は井口村井口遺跡第II期の土器群〔橋本他1980〕に比定され、文様は縄文のみ施文のもの。幅広沈線に肩状痕文をもつものがある。

第2表 器種組成の比較 (壺は除く)

地域	遺跡名 遺構名	器種					縄		鉢	瓶	須 恵 器
		高 杯	直 口 壺	小 型 壺	手 づ く ね	黒色 以外	黒色				
県西	北野B地区 第1・2号住居跡	○	○	○				○			
	道林寺I 第3号住居跡	○	○	○	○	○	○	○			
	竹倉島 上層	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
県東	境野新 第1号住居跡	○		○		○	○	○			
	古沢A 第1号住居跡	○		○	○	○	○	○			
	若宮B SB022・021	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

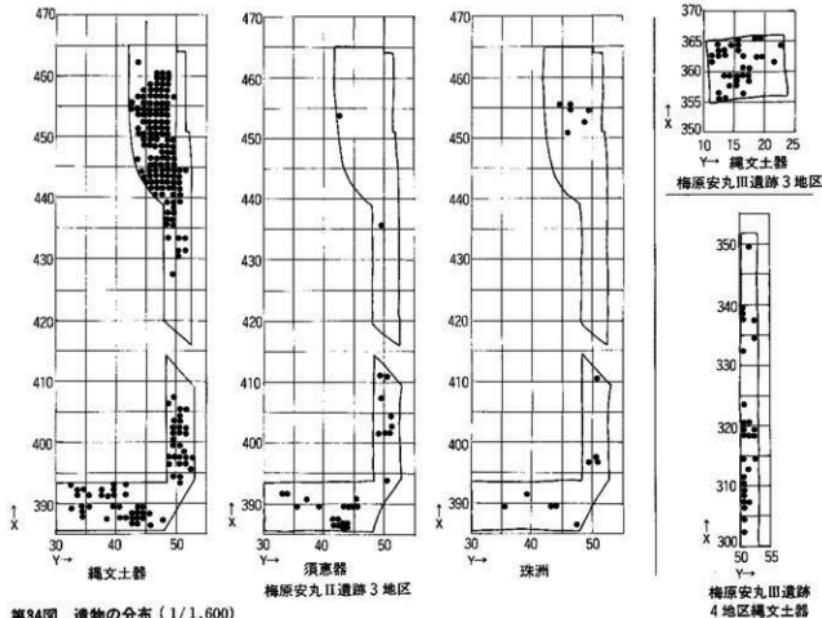
IV ま と め

1 今回、発掘された縄文土器は第34図が示すようにII遺跡3地区X440～X460区に多く出土している。平成2年度の試掘調査結果によれば、旧用水路を挟み東と西に「縄文時代後期の土器だまり」が確認されている。この農道新設地は東側土器だまりの北西端に該当する。今回調査で得られた土器は後期後半に帰属するものが大半を占めている。各々の土器の問題点も多いと思われるが、特に東海系土器（規塚Ⅲ式）に関連する。近縦の分布などを取り上げたい。

（土器の記述は報告書に準拠する。）

①朝日町境A遺跡〔狩野・酒井1991〕 口縁部に粘土紐

を貼付ける例ではなく縦位の沈線を施する。 ②鶴中町二本櫻遺跡〔濱1972〕 口縁部が「く」の字形をし、口縁に隆帯を縦位置に貼付ける壺形土器 ③大沢野町布尻遺跡〔柳井他1977〕 「く」の字形に内屈する口縁部に縦位の短線を貼り並べるものと、沈線を引き並べるものがある。 ④井口村井口遺跡〔小島1966・橋本他1980〕 ⑤表面採集資料で第1群第4類に分類され、頸部より外曲してきた口辺が、強く内屈する壺形土器、内屈する口辺部に短い隆帯が縦に平行に付く。 ⑥発掘資料で井口第I期に分類され、口縁部に縦位の隆帯を貼り並べるものと、円形のものを貼付けるものがある。 ⑦平村東中江遺跡〔岸本他1982〕 第II群第3・4類に分類され、「く」の字形に内屈する口縁部（複合口縁）に縦位の隆帯を連絡して貼り付けるもの、隆帯のかわりに円形のものを張り付けたもの、複合口縁部を縄文帯としたのは、縦位の沈線を連続して施すもの。 ⑧金沢市米泉遺跡〔西野他1989〕 ⑨平根深鉢24類に分類されて内屈する丈の短い口縁に隆帯を縦置きに貼付 ⑩口縁部に幅広の沈線 ⑪口縁端部に円錐形の突起を貼り付けるもの。 ⑫富来町酒見新堂遺跡〔市堀1974〕 口縁に沈線を縦位に貼付けたもの、隆線に沈線を刻むもの。 ⑬野々市町御経塚遺跡〔高堀地1983〕 酒見式土器に分類され、口縁部に短い縦隆線を貼付け、さらに縄文施文のもの。直



第34図 遺物の分布 (1/1,600)

口した口縁に縄文を施文、縦方向に等間隔に削るもの。⑨鶴来町白山遺跡〔西野他1985〕 第6群土器に分類され、湾曲して内屈する口縁を持ち、縦に粘土縁を貼付するもの。「く」の字状に屈折する体部を持ち、口辺部に縦位の团子状突起を貼付けるもの。⑩押水町うまばち遺跡〔西野1983〕 第3群土器に分類され、外反する口縁が断面三角状になり、幅の狭い縁帯部を持ち縦位の沈線を施す。⑪加賀市横北遺跡〔湯尻他1977〕 第2群土器に分類され「く」の字形口縁の壺、口縁帯に粘土縁と円形浮文を貼り縄文施文。⑫河内村福岡遺跡〔山本他1987〕 第5群土器に分類され、深鉢で、口縁部に細い粘土縁を貼付する。⑬勝山市鹿谷本郷遺跡〔中山他1977〕 表記資料である第1群土器に分類され、口縁部に刃突を加えた縦長の壺をはりつける。⑭河合村室屋遺跡〔増子1971〕 A～C地区に出土。口縁部に隆帯を貼付けるもの。縦位の沈線を施文する2種がある。以上取り上げた遺跡では酒見式、井口第I期段階が並行。これら④～⑩の遺跡から若干ではあるが、当遺跡の出土例にある、口縁部に隆帯を貼らず円形の突起の貼付くものが見られる。今後これらを探査し、時間關係を把握したい。(その他の土器についても後日考察したい。) (藤原)

2 梅原安丸Ⅲ遺跡第1号住居跡出土土器群の編年的位置 この時期の土器に関して、田嶋明人氏による研究〔田嶋1991・1986・1987〕がある。田嶋氏はこの時期の土器型式を個人食器として古代につながる器種であるとしている〔田嶋1991〕。さらに、須恵器との関連で楕・高杯等のミガキ手法・黒色処理盛行や須恵器模倣器種の成立により3様式と4様式が区別されている。梅原安丸Ⅲ遺跡第1号住居跡出土土器群は黒色処理の盛行が認められない、須恵器の欠如等から、3様式Ⅱ期〔田嶋1991〕に併行と現時点では考えている。しかし、壺の内1点にミガキ手法が認められ、4様式Ⅰ期に近い様相も認められる。この点に関しては、黒色処理の成立時期の問題〔伊藤1987〕・在地須恵器の成立時期〔西井他1988〕等、加賀との地域差を考慮し県内の資料を詳細に検討する必要があると思われる。

3 梅原安丸遺跡の区割溝について SD-1・2・3は発掘の都合上幾つかの溝に分類したが、地割り等の一つの機能をしたと考えられる。また航空写真(図版2-1)では柵の刈取直前の状態でSD-01の延長とみられる痕跡(クロップ・マーク)〔村井・木全編1992〕がみられた。また、大正時代の地籍図(第2図)や東海北陸自動車道開通の調査でも現在とは異なる地割りが観察できる。この地割りについては今後の研究課題となってくるであろう。(岡本)

引用・参考文献 (続文時代関係の文献を除く)

- イ 伊藤隆三 1987 「富山県小矢部市道林寺遺跡」(『小矢部市埋蔵文化財調査報告書』第22冊) 小矢部市教育委員会
伊藤隆三 1990 「出土土器の編年の位置」(『富山県小矢部市北戸坂遺跡・草薙遺跡の発掘調査概要』)(『小矢部市埋蔵文化財調査報告書』第30冊) 小矢部市教育委員会
井上蕃久男 1985 「16世紀の瀬戸、美濃窯」「中近世土器の基礎研究」 日本国中世土器研究会
上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』 No.2 貿易陶磁研究会
上野 肇・橋本 正・岸本雅敏・池谷 久也・寺島 1978 「宮道跡発掘調査報告書」 富山県教育委員会
カ 特野 肇・久々志義・橋本正義 1982 「北陸自動車道沿線跡発掘報告一立山町十輪・石器編」 富山県教育委員会
特野 肇・久々志義・橋本正義 1986 「北陸自動車道沿線跡発掘報告一立山町本製品・絆括編」 富山県教育委員会
ク 久々志義 1986 「富山県内の漆器について」『大塚・第10分』富山考古学会
コ 酒井重洋・山本正敏・開 清・島田修一・北川美佐子 1987 「富山県小杉町北野遺跡・椎土遺跡緊急発掘調査概要」 小杉町教育委員会
サ 新藤正夫 1981 「高岡・城端道」「富山県歴史の遺跡調査報告書一屏風街道(その2)五箇山道」 富山県教育委員会
神保俊造 1991 「富山県福光町海原安丸遺跡群」(『沿岸町教育委員会』
タ 田嶋明人 1991 「土器の編年・北陸」「古墳時代の研究」 6 羽山閣
田嶋明人 1986 「津町遺跡」(『石川県立埋蔵文化財センター』
田嶋明人 1987 「永谷マグマガリ遺跡」(『石川県立埋蔵文化財センター』
ツ 部出比呂志 1985 「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』 大阪大学文学部
ト 土肥富士夫・橋本潤一 1985 「奈良時代の城跡」(『石川県立黄土町教育委員会・志賀町埋蔵文化財調査委員会』
富山県 1981 「十地分類基本調査 城端 5万分の1」(国土地理院)
富山県文化振興財团 1990 「東海北陸自動車道開通発掘調査報告」(1)
富山県文化振興財团 1991 「東海北陸自動車道開通発掘調査報告」(2)
ナ 中島俊一・浅田耕治 1978 「辰口町高庭遺跡発掘調査報告」(2) 石川県教育委員会
植崎彰一・田中周久 1986 「越前名陶器縁」(『福井県陶芸館』) 福井県陶芸館
ニ 西井龍儀・井寺巖州・大野 実 1988 「水見市阿カシア病跡」「大塚」第12分 富山考古学会
ハ 橋本潤一 1974 「高岡遺跡の調査概要」(『富山町史』資料編 富山町
フ 福光町史編纂委員会 1971 a 「福光町史」上巻 福光町
福光町史編纂委員会 1971 b 「福光町史」下巻 福光町
藤田富士夫・高橋修宏・古川知明 1983 「古見八連跡発掘調査概要」 富山市教育委員会
藤田富士夫・橋本正義 1974 「富山市塙野新堀遺跡発掘調査報告書」 富山市教育委員会
木井俊治・木全敏雄 1991 「岡説ハイテク考古学」 河出書房新社
吉岡康輔 1989 「論證珠洲古陶」「珠洲の名陶」 珠洲市立珠洲焼資料館
吉岡康輔・橋本潤一 1965 「石川県能郷郡能郷町金ん古道跡の上層器」(『石川考古学研究会誌』第9号) 石川考古学研究会
四柳嘉章 1991 「古代～近世漆器の変遷と漆装技術」(『石川考古学研究会誌』第34号) 石川考古学研究会

V 試掘調査の概要

試掘調査は、No.1 遺跡からNo.7 遺跡のうち、平成3年度の工事区域に係る5箇所を対象とした。これらの遺跡は西側に大井川、東側に山田川に挟まれた標高約70m~75m段丘上に位置する。

調査は、重機及び人力によって試掘トレンチを掘り下げ、遺物包含層及び遺構の有無確認を目的とした。

1. No.1 遺跡（第35図、図版25の1~3）

調査は、東側に隣接する段丘に入り込む小規模な開拓谷出口にある。一帯の層序は、1層耕作土（20~25cm）、2層黒色粘性土（30~50cm）、3層黄褐色粘性土（10cm）と堆積し、黄褐色砂礫層に至る。調査の結果、遺構・遺物ともに確認されず、調査中央部で南北に走る小谷地形が観察されたのみであった。

2. No.2 遺跡（第36図、第38図1~11、図版25の4~8、図版26の1~4、図版28の8、図版29）

一帯の層序は、前述と同様の1~3層が堆積し、黄褐色砂礫ないしは青灰色砂層に至るのを基本とするが、河原等の影響が強く、地点ごとにかなり複雑な様相を呈する。調査の結果、調査区の南北両側で東西に調査区を横切って谷地形・自然流路が走り、これに挟まれた微高地に遺構・遺物が確認された。確認された遺構には、柱穴、穴、溝などがある。これらの確認面までは地表より15~30cmと浅く、遺物包含層は遺存しない。出土遺物には、縄文土器（1・2）、石器、土師器（4~5）、須恵器（3）、珠洲焼（6~10）の他、土師質小皿、近世陶磁器などが認められた。詳細を知り得る個体は少ないと、図示した縄文土器片及び須恵器・土師器は遺構復元上面より出土したもので、前者は縄文晩期、後者は8~9世紀代と考えられる。以上、当遺跡は古代~中世を主体とする集落跡と考えられ、約7,000m²の規模で広がる。なお小字名より梅原出村Ⅱ遺跡と呼称する。

3. No.4・5・7 遺跡（第37図、第38・39図12~27、図版26の5~8、図版27~28の1~7、図版29・30）

分布調査の時点では3遺跡に区分して認知されていた。しかしながら調査の結果、それぞれの地区にまたがって新たに2遺跡が確認されたため、それぞれの調査成果を統合して述べる。

層序は、1層耕作土（20~30cm）、2層黒褐色土（20~80cm、谷部では粘性強）、3層黄褐色シルトないし砂・砂礫層と堆積するものの、箇所によっては耕作土直下が砂礫層となる場合や、かつての圃場整備に伴う客土の堆積が認められた。調査区内では、南北ないし南西側より北東に走る大小様々な谷地形・川跡が観察され、この谷に囲まれた微高地に、地点を逸て縄文時代、古代~中世、近世の遺構・遺物が確認された。

その成果を統合して、No.4 遺跡南西部からNo.7 遺跡の西側一帯と、No.4 遺跡南東端部の2箇所で遺跡の広がりが確認でき、小字名より前者を梅原出村Ⅲ遺跡、後者を梅原上村遺跡と命名した。前者は当初の予測を超え、県道沿いまで広がることが判明し、また後者は南・東側の未調査区（No.3、No.5 東側）へさらに広がる様相を示す。梅原出村Ⅲ遺跡は、北端部は縄文時代、中央部は古代、南部は古代~中世を主体とする遺跡である。

出土遺物には、縄文土器（12~31）、石器（32）、打製石斧（33~34）、須恵器（36~52）、土師器（53~59）、珠洲焼（64~70）、中世土師器（60~63）、青磁、瓷器系陶器（71~72）、越中漬戸焼（74）などが認められた。

縄文土器には前期後葉福浦層式期（30~31）など様々な時期のものが認められるが、気屋式のものがその主体を占める。須恵器・土師器は大半が遺跡中央部で確認された包含層より出土した。須恵器杯蓋、杯は殆どが口径11~12cmの小型品である。36は北端部の川跡内より出土した墨書き器で、「本」と記される。土師器壺は、口縁部が外傾し、端部を上方に積み上げ面取りする特徴をもつ。これらは年代的に8世紀後半~9世紀前半と考えられる。珠洲焼は、1層・2層からの出土が多い。64のL1線部の特徴から年代的には第Ⅳ期〔古岡1981〕に比定できる。土師質壺は口径13~14cmで、ゆるく外反するL1線部を呈するもの（61）、やや内縫して立ち上がるもの（60）の他、小型の類（62~63）がある。珠洲焼の時期も考慮して、年代的には14世紀代と考えられる。

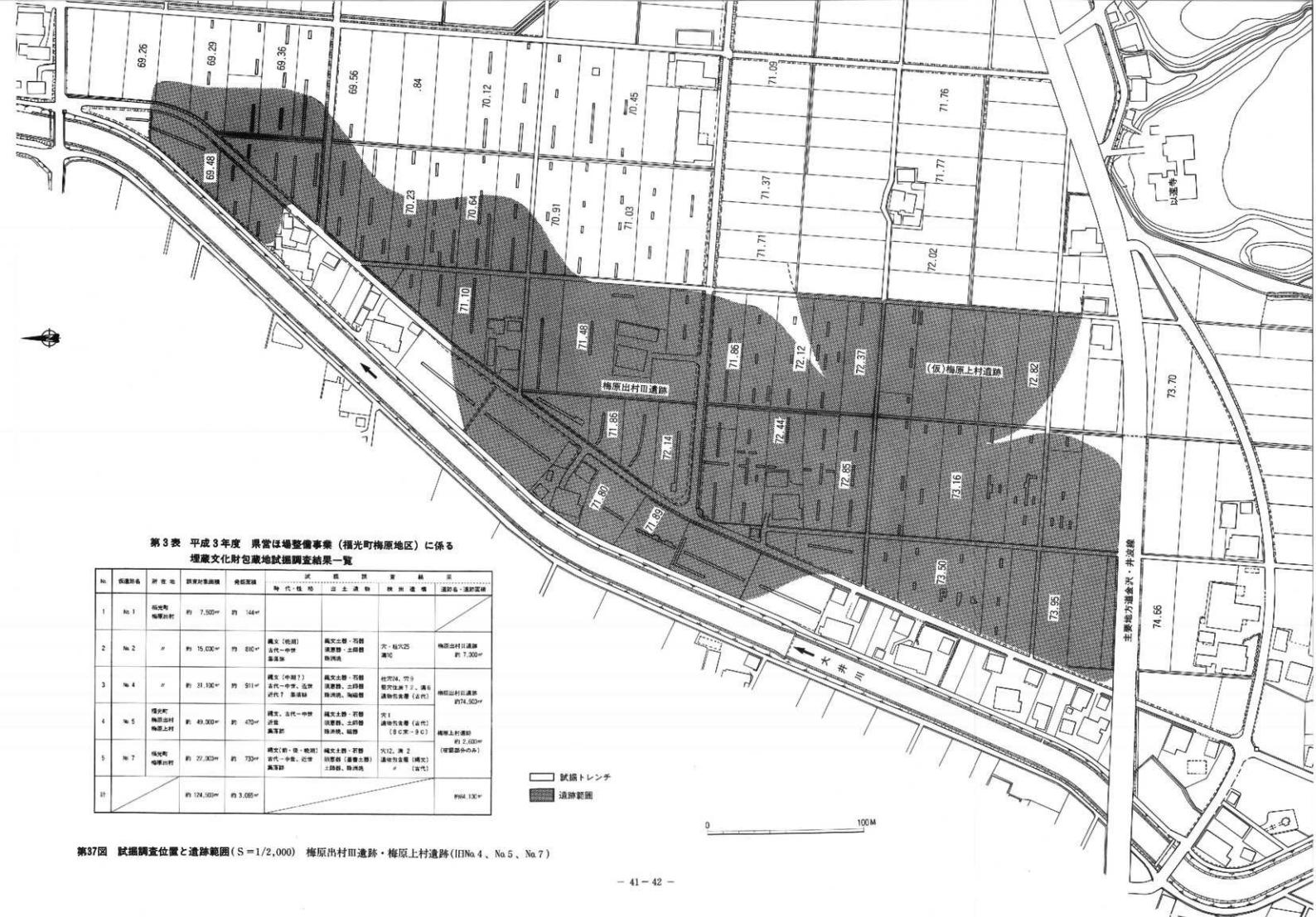
（島田）



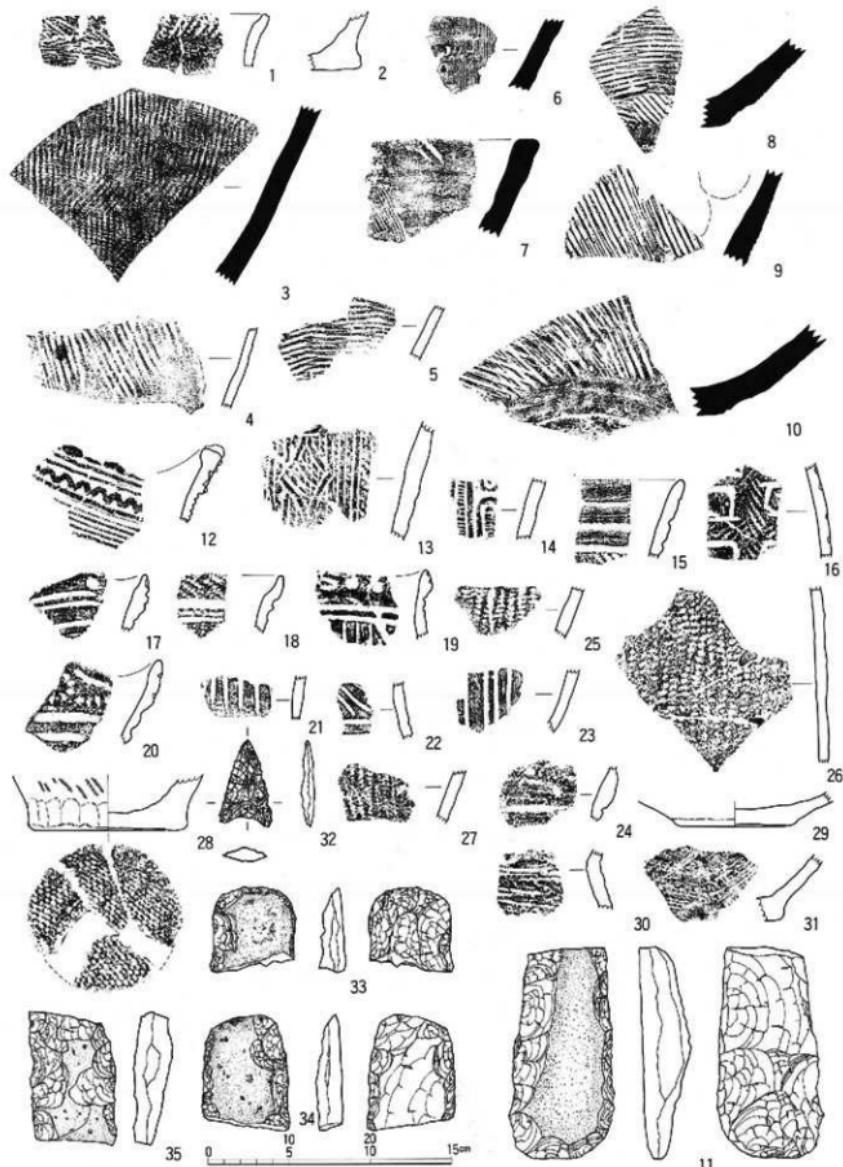
第35図 試掘調査位置と遺跡範囲 ($S=1/2,000$) No.1 遺跡



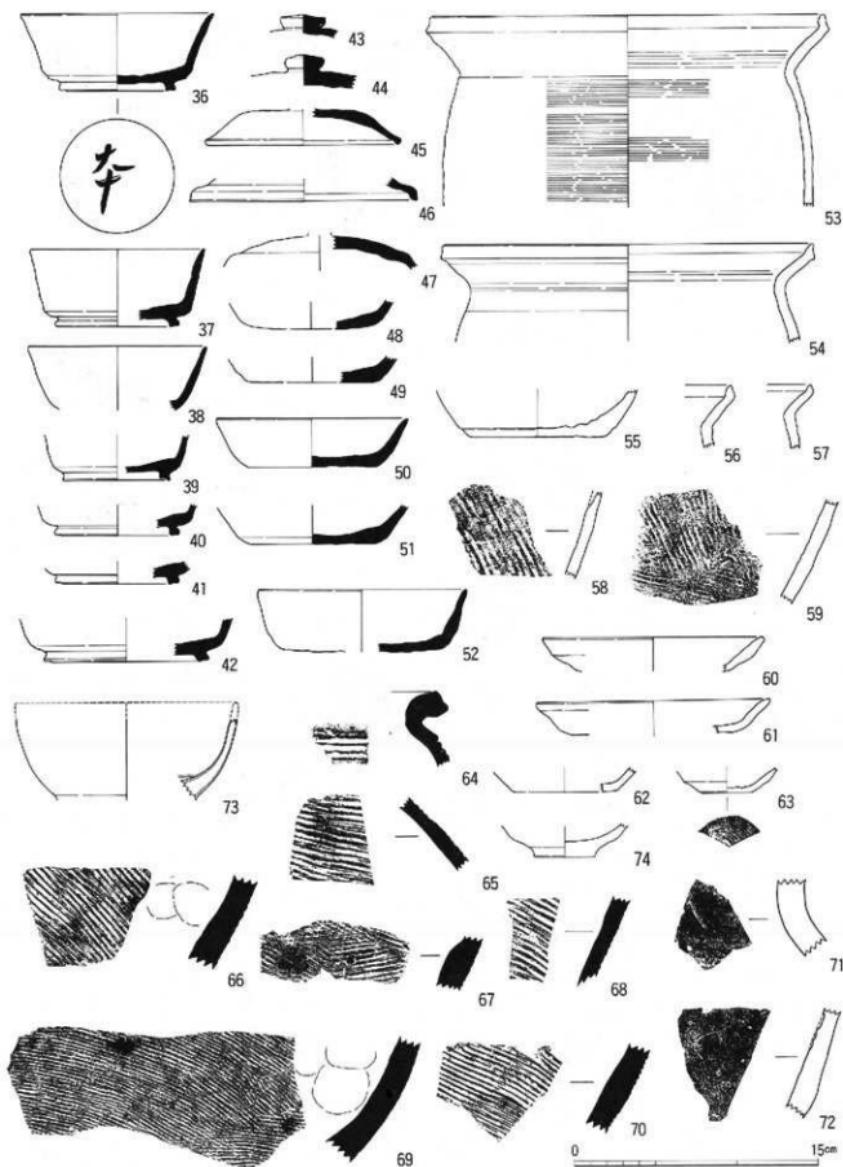
第36図 試掘調査位置と遺跡範囲 ($S=1/2,000$) (印No.2 遺跡)



第37図 試掘調査位置と遺跡範囲($S = 1/2,000$) 梅原出村III遺跡・梅原上村遺跡(旧No.4、No.5、No.7)



第38図 遺物実測・拓影図(1/3、32は2/3) 1~11:梅原出村II遺跡(田No.2)、
12~35:梅原出村III遺跡(田No.4・5・7)



第39図 遺物実測・拓影図(1/3) 梅原出村III遺跡(旧No.4・5・7)



図版 2
梅原安丸遺跡



1. 航空写真

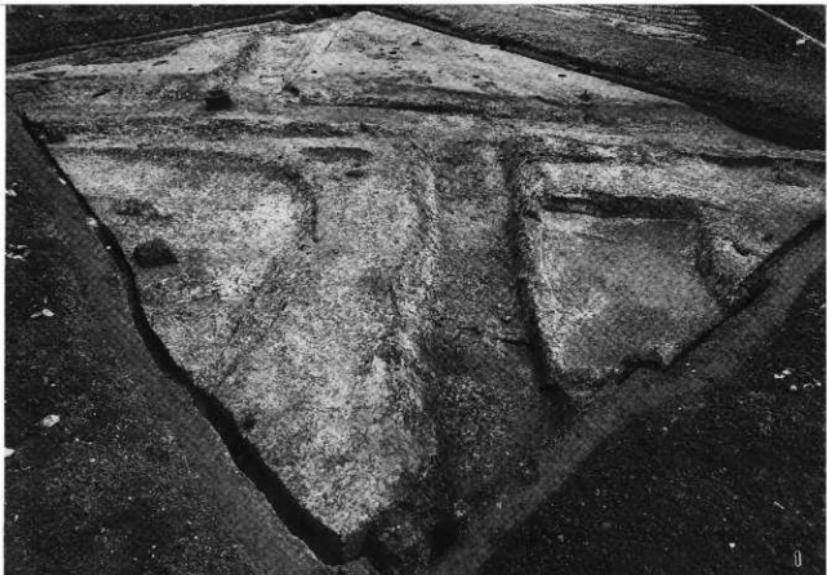


2. 全景(西より)

図版 3

梅原安丸遺跡

1. 全景(西より)



1

2. 全景(東より)



2

3. SD-3断面(西より)
X43、Y35



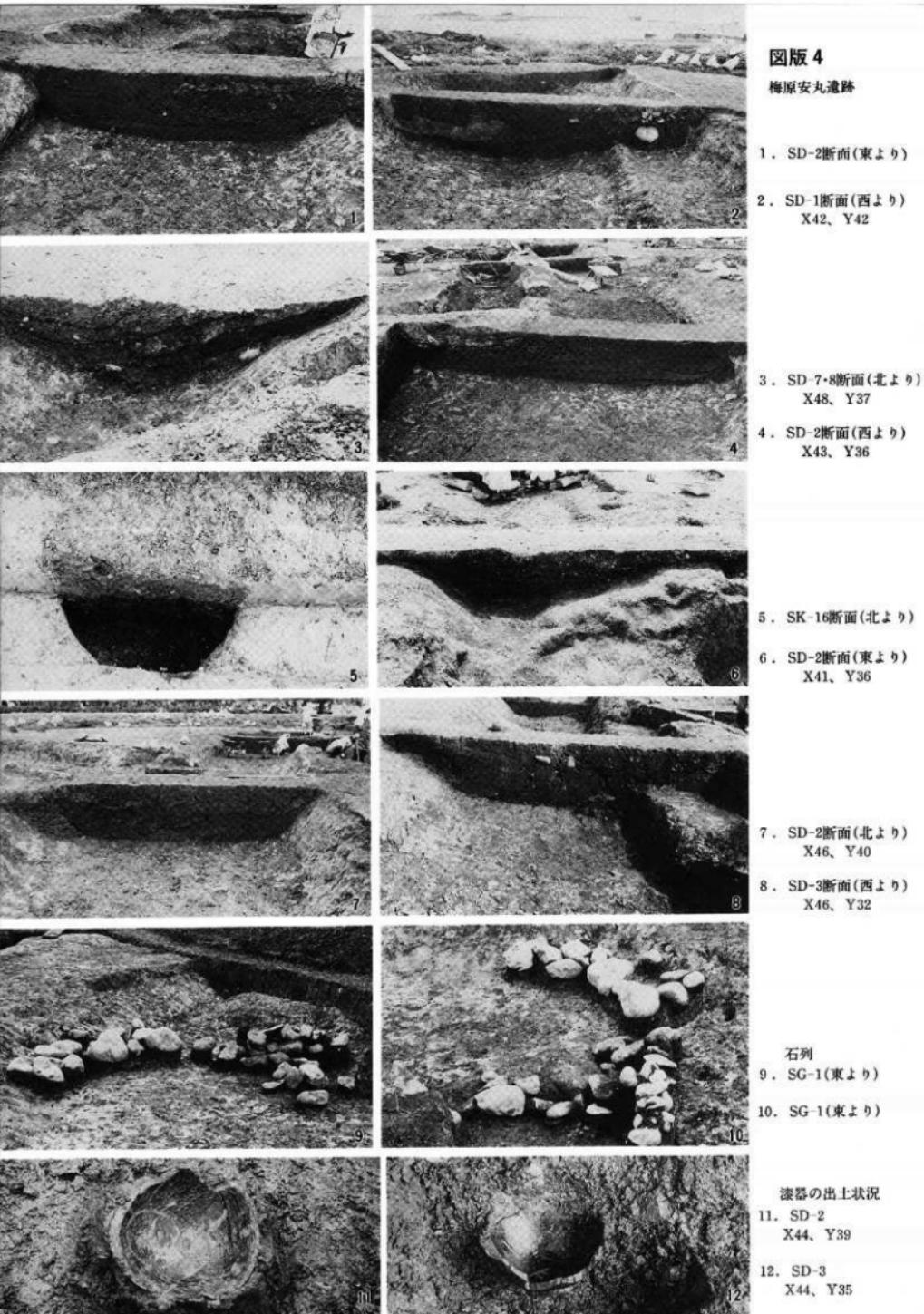
3

4. SD-2・6断面(東より)
X42、Y38



4

図版 4
梅原安丸遺跡



図版 5

梅原安丸II遺跡

1. 4地区
全景(西より)



2. 3地区
全景(北より)



3. 3地区
全景(南より)



図版 6
梅原安丸II遺跡
3 地区



1. 全景(北より)



2. 全景(南より)



3. 全景(南より)

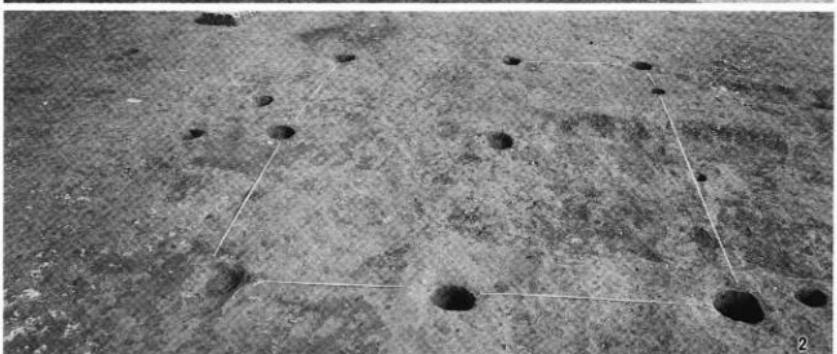
図版 7

梅原安丸II遭路

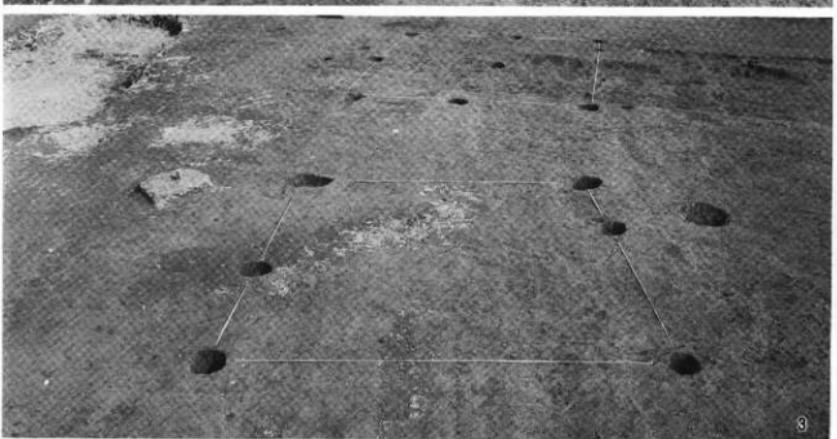
1. 4地区
SB-3(南より)



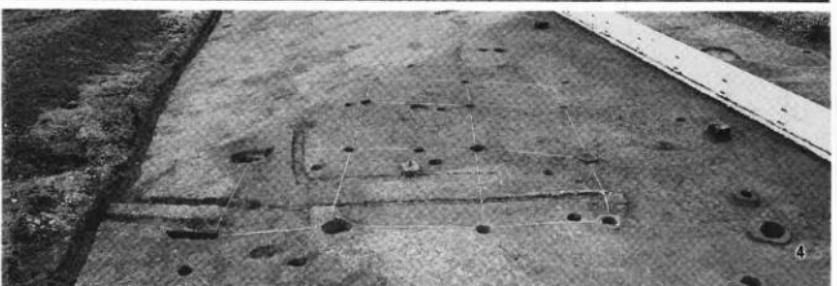
2. 4地区
SB-4(西より)



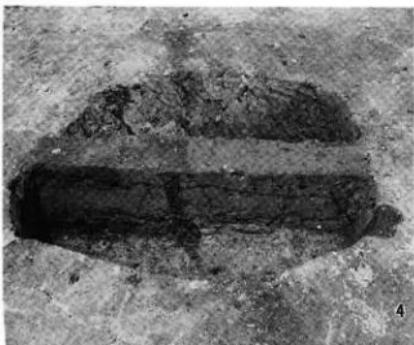
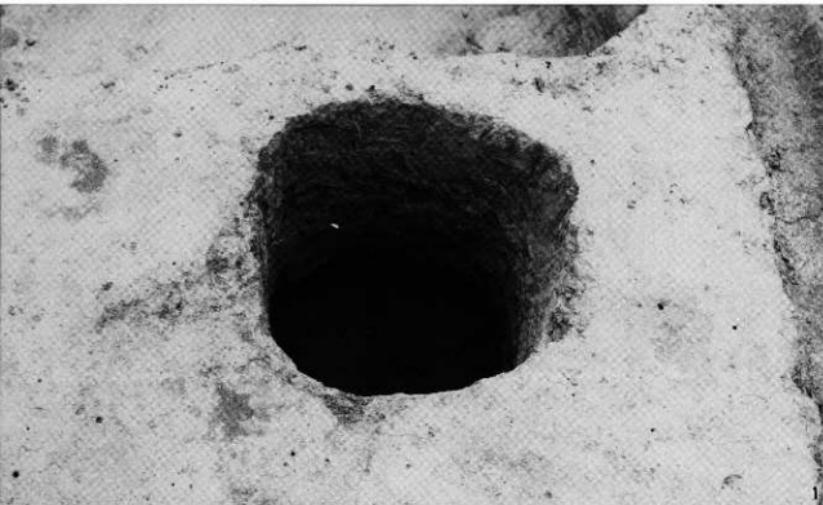
3. 4地区
SB-2(南より)



4. 3地区
SB-1(南より)



図版 8
梅原安丸II遺跡

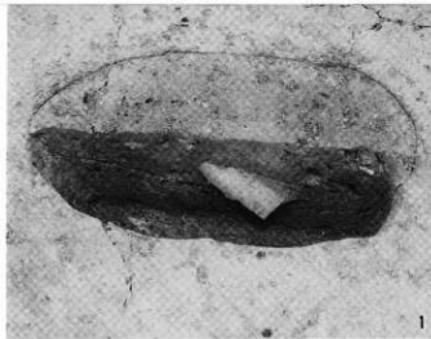


4. 3地区
SK-5断面
(東より)

図版 9

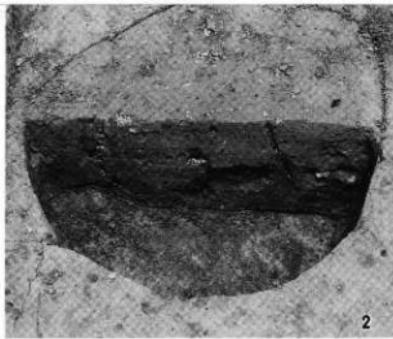
梅原安九日遺跡
3 地区

1. SK-26断面
(南より)



1

2. SK-34断面
(南より)



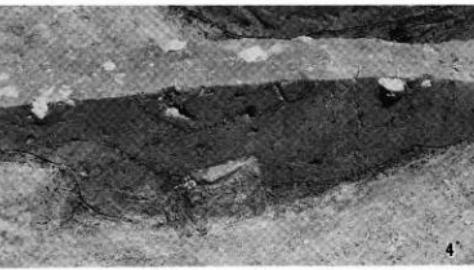
2

3. SK-17断面
(南より)



3

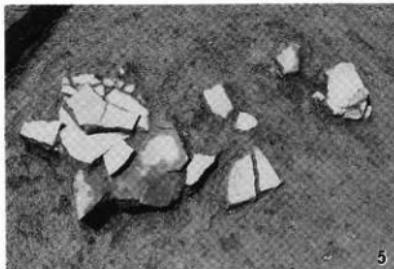
4. SK-31断面
(西より)



4

遺物出土状況

5. X444、Y51



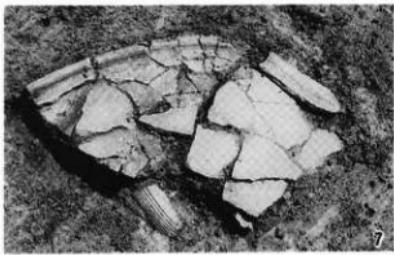
5

6. X456、Y47



6

7. X453、Y49



7

8. X458、Y48



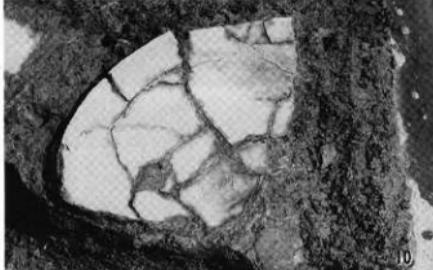
8

9. X455、Y48



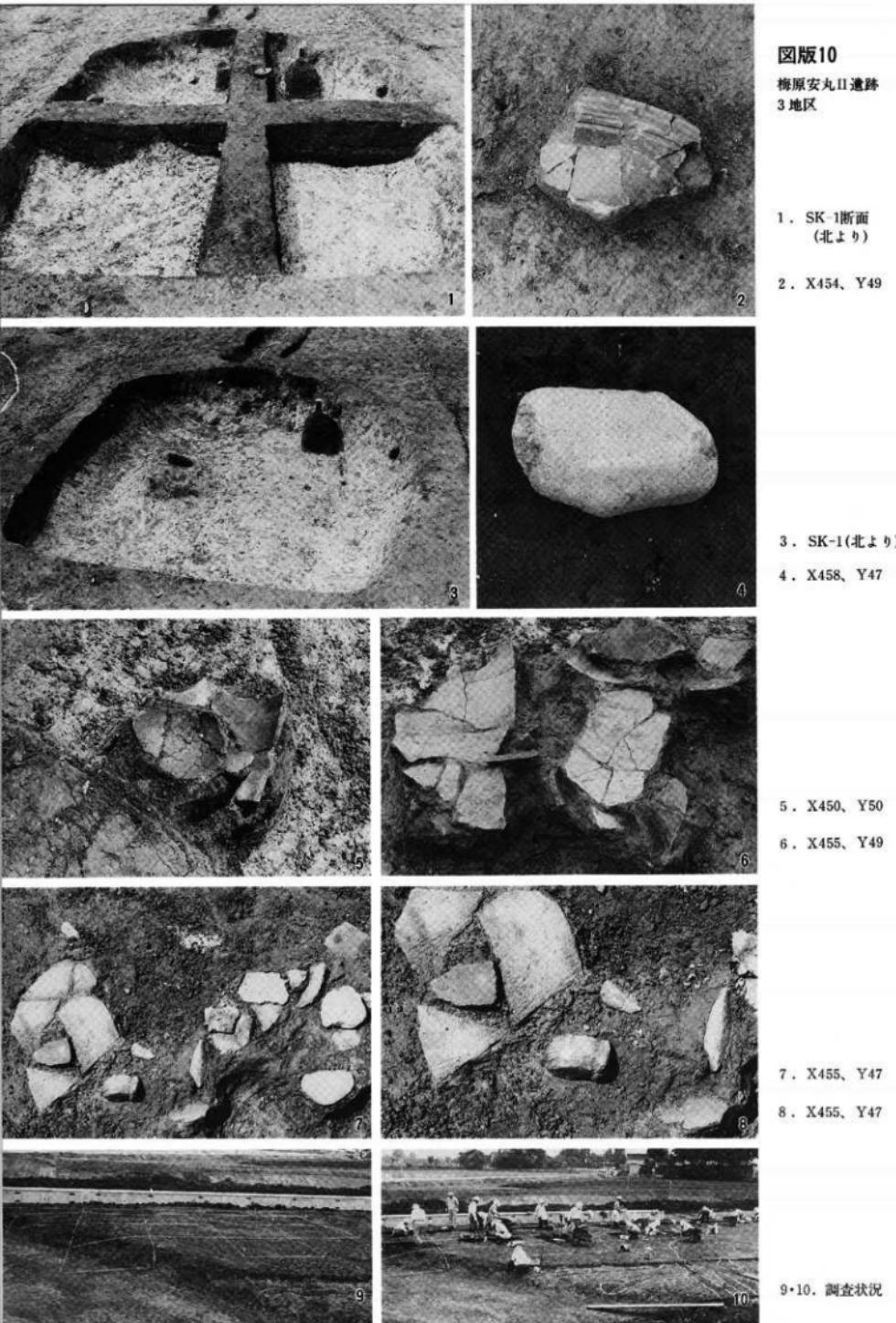
9

10. X450、Y50



10

図版10
梅原安丸II遺跡
3地区



図版11

梅原安丸Ⅲ遺跡

1. 3地区
全景(東より)



2. 4地区
全景(北より)



3. 4地区
全景(南より)



図版12
梅原安丸田遺跡
4地区



1. 第1号住居跡
(北より)



2. 第1号住居跡
(西より)



3. 第1号住居跡
(北より)

図版13

梅原安丸Ⅲ遺跡

1. 3地区
SK-1(北より)



2. 3地区
X363、Y12



3. 3地区層序



4. 4地区
調査状況



5~10.
4地区
第1号住居跡
遺物出土状況



図版14

梅原安丸遺跡出土遺物



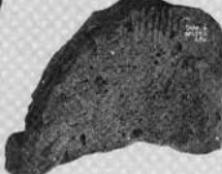
1. SD-1~SD-3

1



2. SD-8

2



3. 包含層

3

図版15

梅原安丸遺跡出土遺物

1. FD-3

2. SD-2

1

2

3

3. SD-1

4. SD-6

5. SD-3

4

5

5'

6. SD-1

7. SD-3

8. X47、Y38

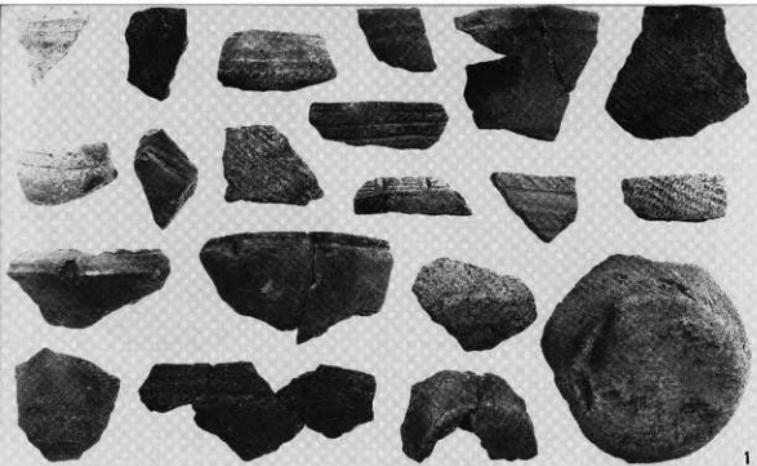
6

7

8

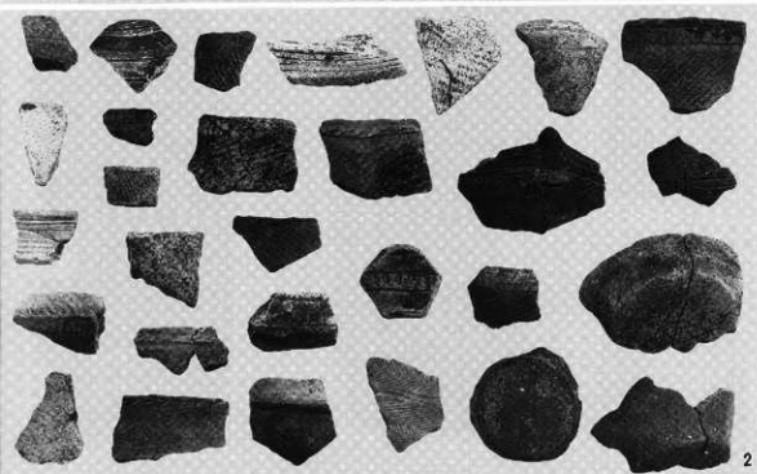
図版16

梅原安丸II遺跡
3地区出土遺物



1. SK-1・3・5・9・10
13・14

1



2. SK-23・25・29・31
32・55・70

2



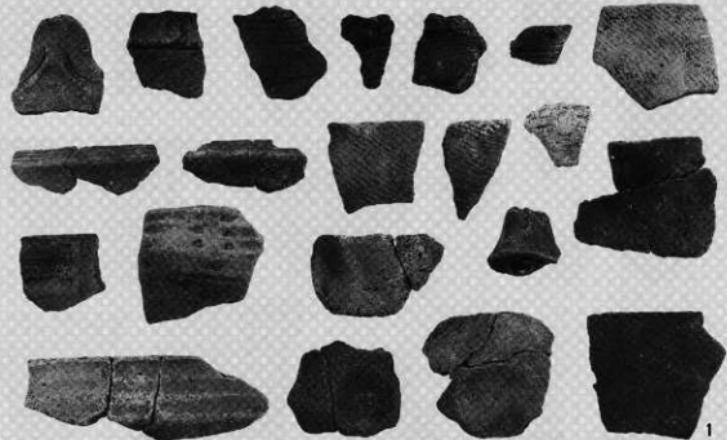
3. SK-6

3

図版17

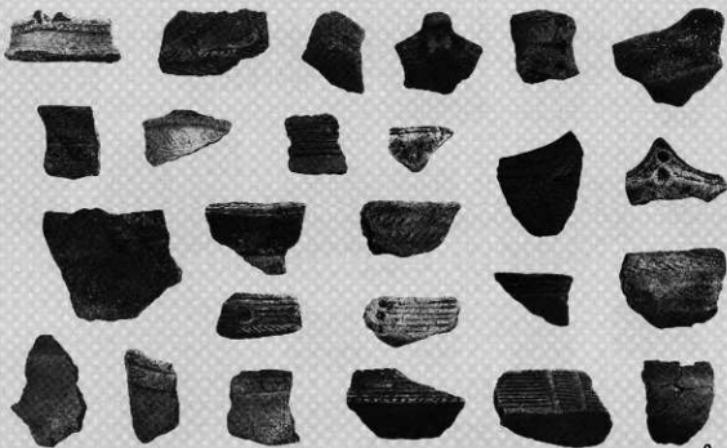
梅原安丸II遺跡
3地区出土遺物

1. SK-6・7



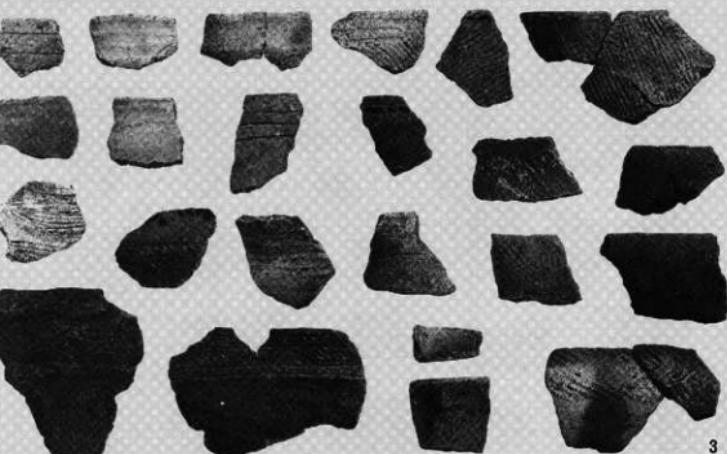
1

2. SK-30



2

3. SK-30



3

図版18

梅原安丸II遺跡

3地区出土遺物

1 . SK-74

1

2 . SK-73・85～87

112・123

138・140・141

2

3 . SK・包含層

3

図版19

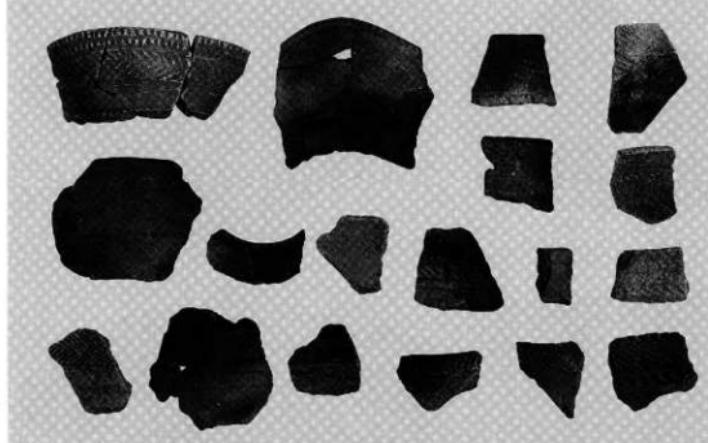
梅原安丸II遺跡
3地区出土遺物

1. SK・包含層



1

2. 包含層



2

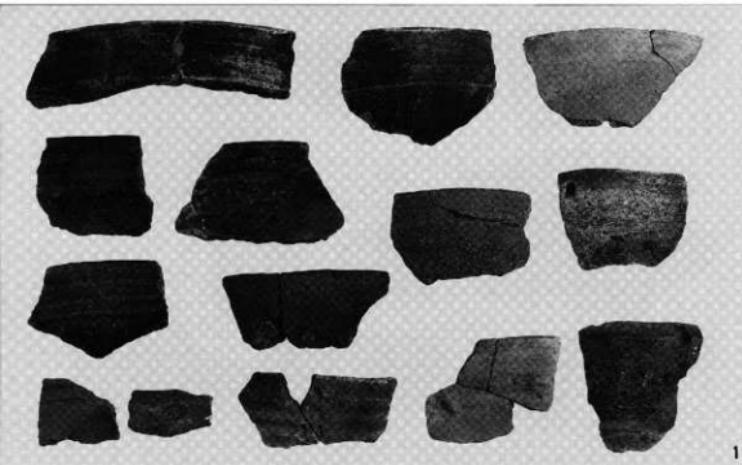
3. 包含層



3

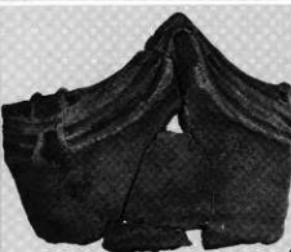
図版20

梅原安九II遺跡
3地区出土遺物



1. 包含層

1



2



2・3. 包含層

3



4



4. SK-30

5



6



7

6～8. 包含層



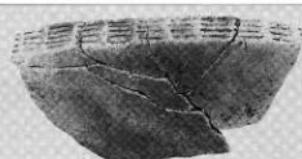
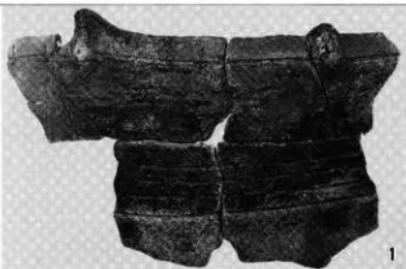
8

図版21

梅原安丸II遺跡
3地区出土遺物

1. SK-74

2~4. 包含層



2



3

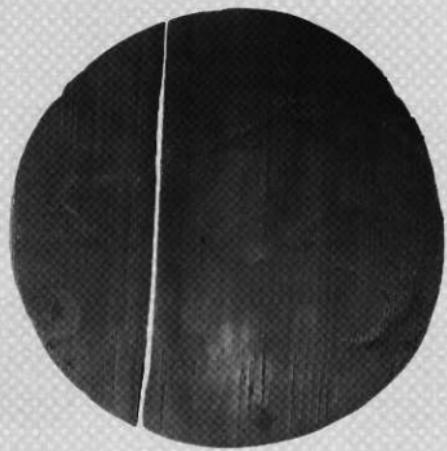


4

5~6. 包含層



5



11



7



12

7~10. 包含層

11~12. SK-50



8



9



10



12

図版22

梅原安丸II遺跡
3地区出土遺物



1. SK・包含層



2. SK・包含層



3. SK・包含層

図版23

梅原安丸II遺跡
3地区出土遺物

1. SK-32
2. 包含層
3. SK-63
4. SK-6
5. 包含層



1



1



2



3



4



5



6



8



7



10



12



9



11



13



14



15

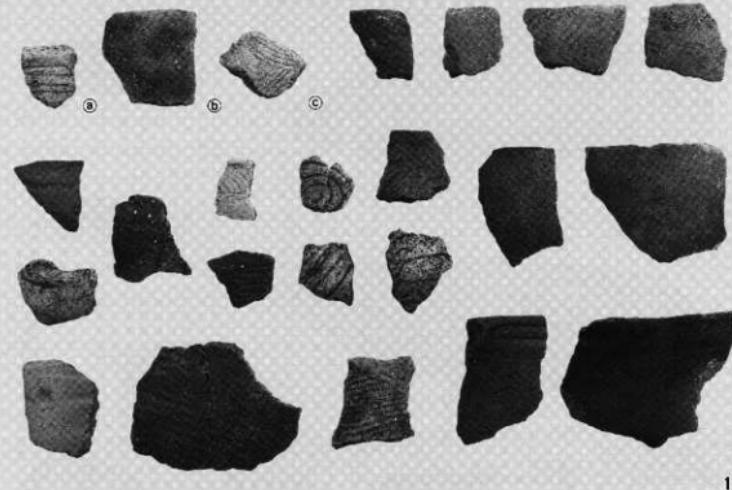
6～9. 包含層

梅原安丸III遺跡
3・4地区出土遺物

10. 3地区包含層
11. 4地区包含層
12. 4地区
SK-3
13. 3地区包含層
14. 3地区包含層
15. 4地区
SK-3

図版24

梅原安丸遺跡
梅原安丸Ⅲ遺跡
3・4地区出土遺物



1. ④～⑥は
梅原安丸遺跡
他はⅢ遺跡

1



2. 4地区
第1号住居跡

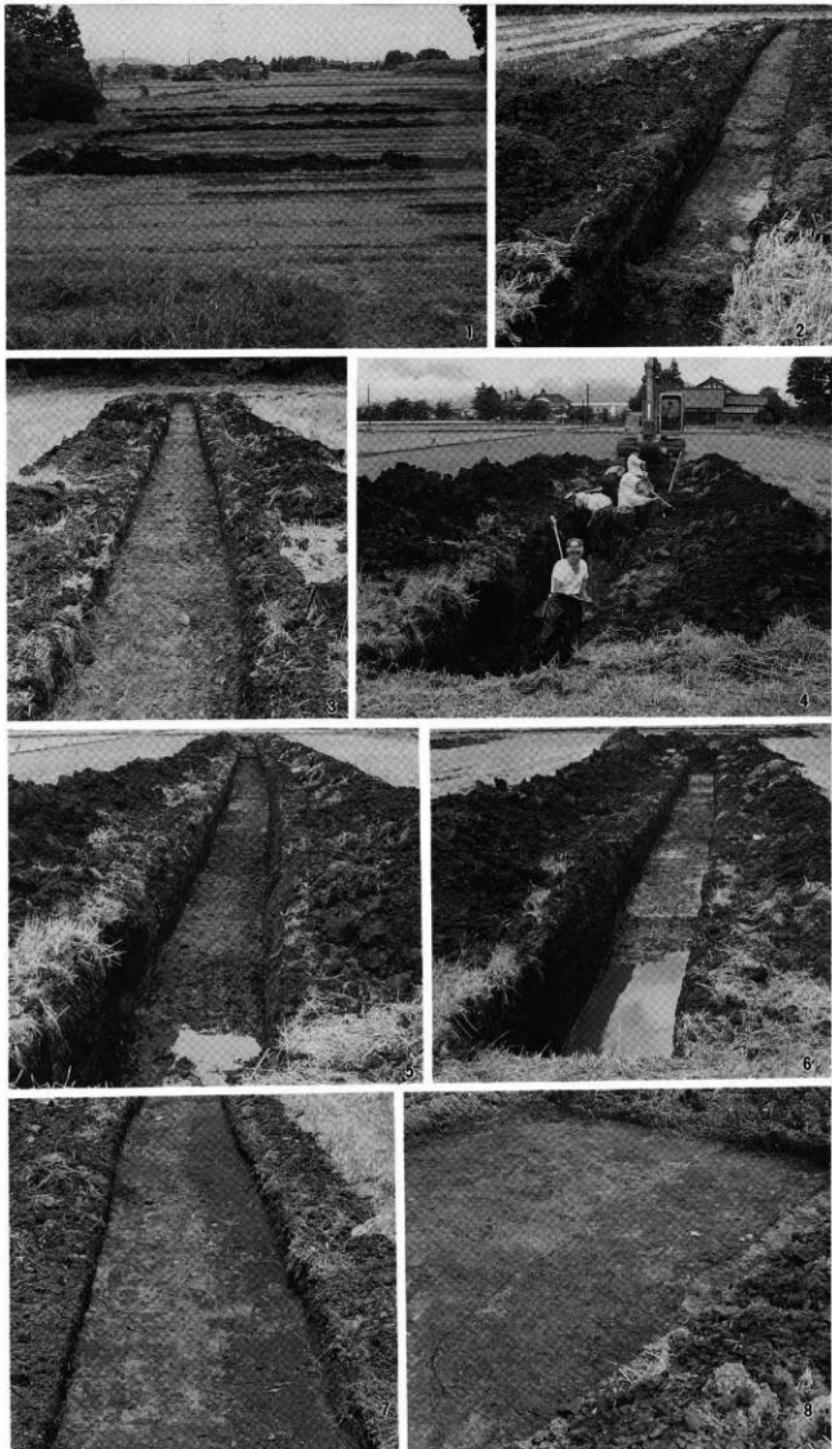
2



3. 3地区
SK・包含層

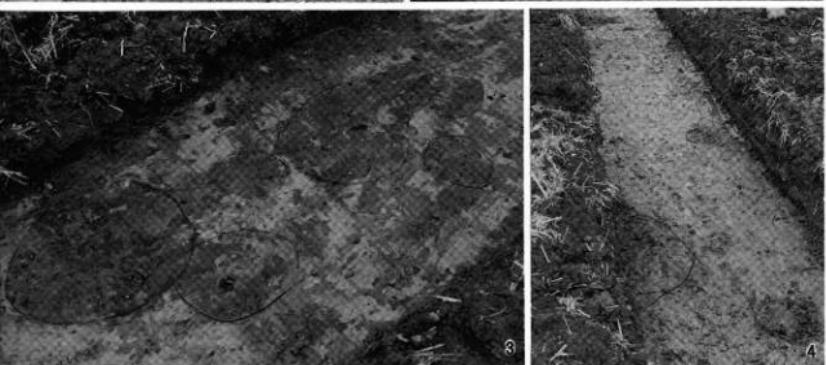
3

図版25

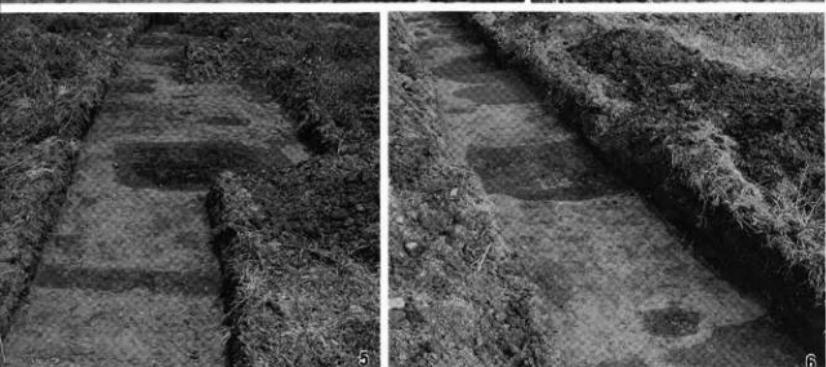




1. 梅原出村II遺跡
18トレンチ

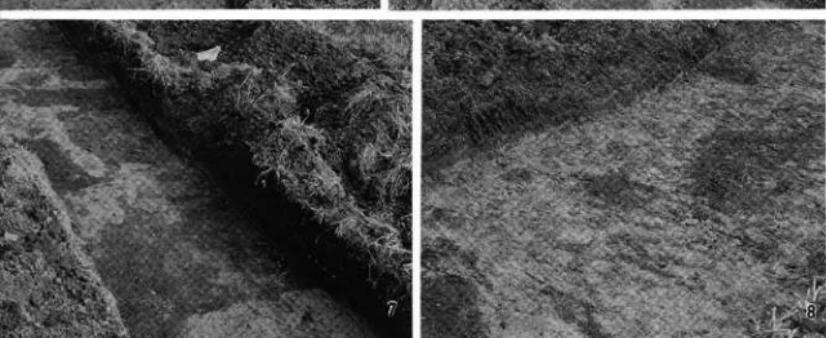


2. 梅原出村II遺跡
23トレンチ



3. 梅原出村II遺跡
25トレンチ

4. 梅原出村II遺跡
(II No. 4)
3トレンチ



5. 梅原出村II遺跡
(II No. 4)
18トレンチ

6. 梅原出村II遺跡
(II No. 4)
18トレンチ



7. 梅原出村II遺跡
(II No. 4)
7トレンチ

図版27

1. 梅原出村Ⅲ遺跡
(IIINo.4)
10トレンチ



2. 梅原出村Ⅲ遺跡
(IIINo.4)
12トレンチ



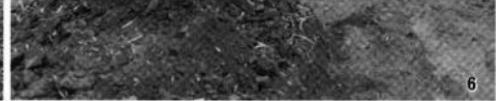
3. 梅原出村Ⅲ遺跡
(IIINo.4)
19トレンチ



4. 梅原出村Ⅲ遺跡
(IIINo.4)
30トレンチ



5. 梅原出村Ⅲ遺跡
(IIINo.4)
36トレンチ



6. 梅原出村Ⅲ遺跡
(IIINo.4)
40トレンチ



7. 梅原出村Ⅲ遺跡
(IIINo.4)
40トレンチ



8. 梅原出村Ⅲ遺跡
(IIINo.4)
41トレンチ





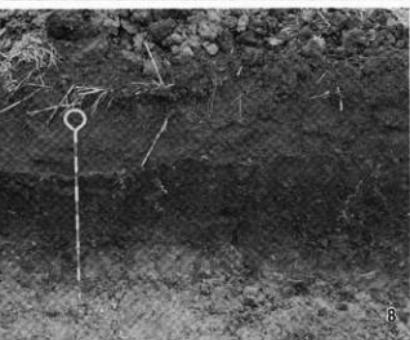
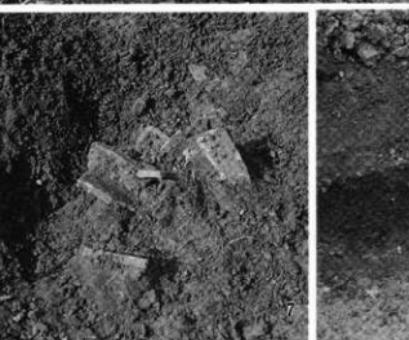
1. 梅原出村III遺跡
(IIINo.5)
⑬トレンチ



3. 梅原出村III遺跡
(IIINo.5)
⑨トレンチ



5. 梅原出村III遺跡
(IIINo.7)
⑮トレンチ



7. 梅原出村III遺跡
(IIINo.5)
⑯トレンチ

8. 梅原出村II遺跡
11トレンチ

図版29

出土遺物(1/3)
1a・4・5は(1/2)



36

1a



37

2



36

1b

1～4.
梅原出村Ⅲ遺跡



38

3



32

4



5

5. 梅原出村Ⅱ遺跡



1



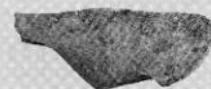
2



5



4



3



10



8



7

9

6. 梅原出村Ⅱ遺跡



12



13



14



15



16

18



19



17



22



21



23



26



20



24



25

29



31



30



27

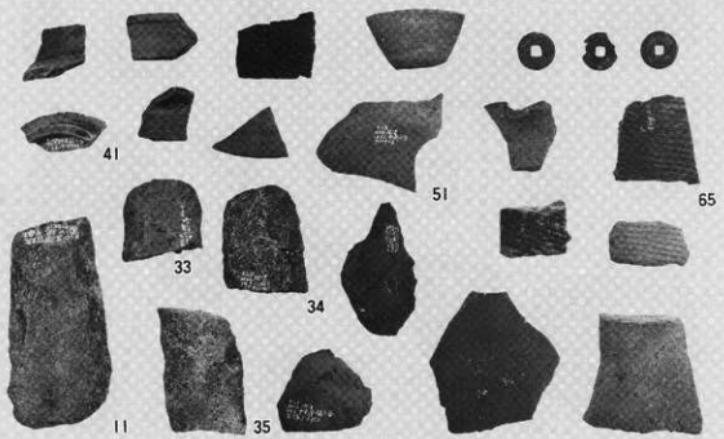
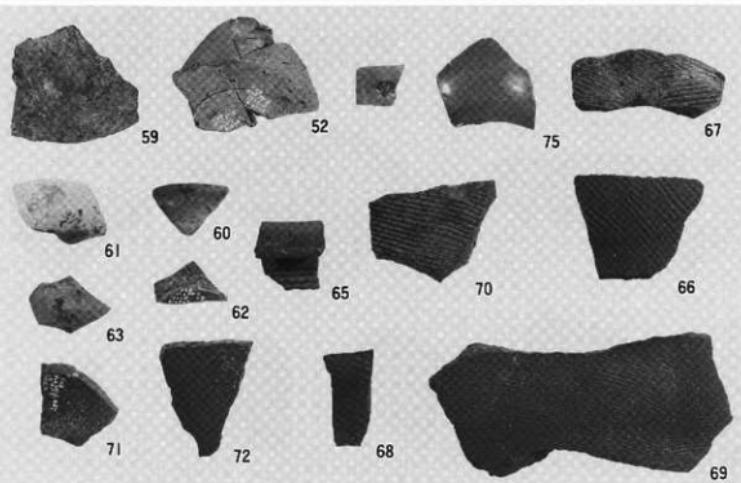
7. 梅原出村Ⅲ遺跡



28

図版30

出土遺物(1/3)
梅原出村Ⅲ遺跡



発掘調査参加者一覧

吉田清三・湯浅友吉・河合孝夫・土居正光・吉田初太郎・安丸宗一郎・中村俊雄・水口正盛・寺田亀吉・大井川政雄・井口ゆり子・井口文子・井口すい子・溝口登志子・溝口あき子・大島笑子・溝口秋子・大門久香・山畠勝子・大井川花枝・大井川あや子・片田敏子・水口つか子・川島昭恵・井口よし子・大川八重子・棚田ゆきえ(以上本調査作業員)、棚田正雄・棚田俊雄・石黒光一・尾川はつい・野村はる・直井綾子・鳴田ふつ子(以上試掘調査作業員)、前田初子・得地惠都子・本居花子・中田美津子・杉本好子(以上遺物整理作業員)

県営低コスト化水田農業大規模整備事業(梅原地区)
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(2)

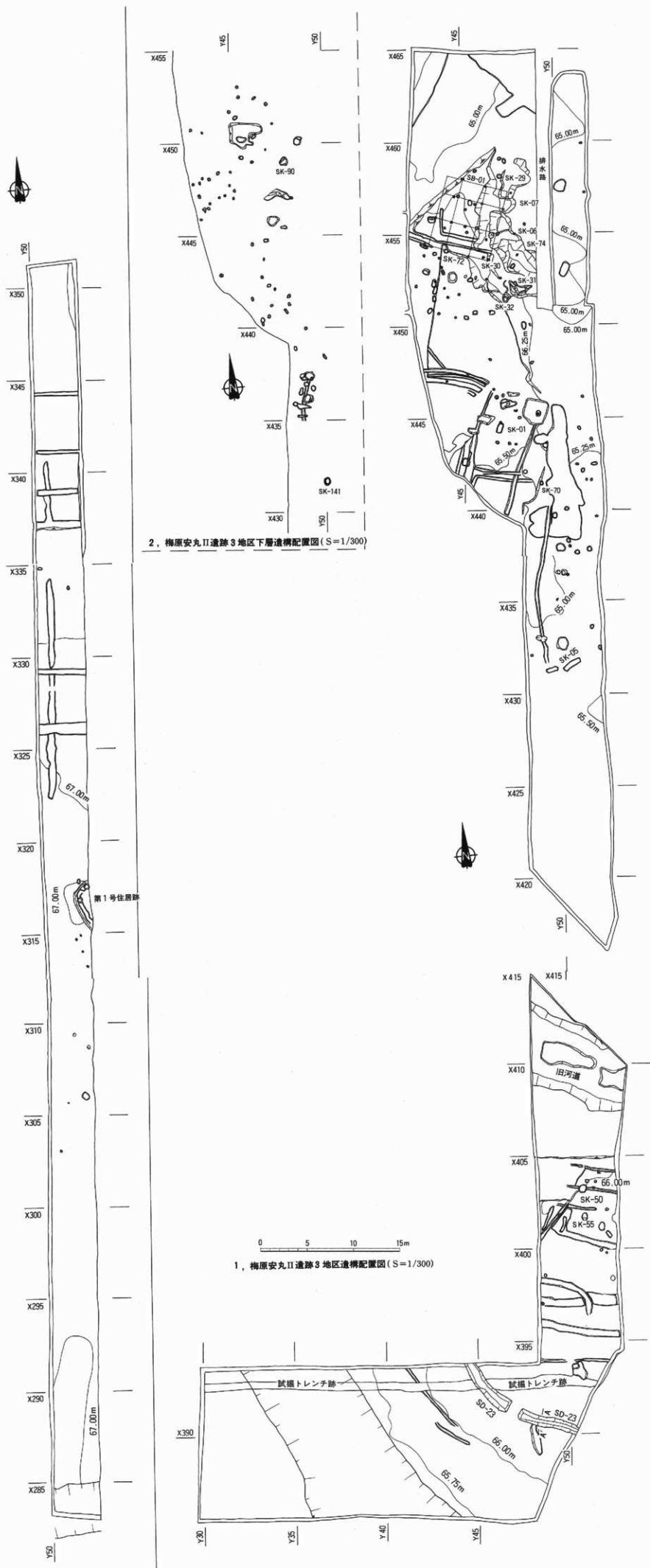
富山県福光町梅原安丸遺跡群II

平成4年3月31日

編集 富山県埋蔵文化財センター

発行 福光町教育委員会

印刷 日興印刷株式会社



3. 梅原安丸III遺跡4地区遺構図 (S=1/300)

